昭和六十年十一月

原　先生御夫妻を偲ぶ

三緑会会報

第四十九号

東京医科大学薬理学教室

三　緑　会

目次

東京医科大学薬理学教室三緑会会則

第一章　総　則

（名　称）

第一条　本会は東京医科大学薬理学教室三緑会と称する。

（目　的）

第二条　本会は東京医科大学薬理学教室に於ける学術の研鑽および向上発展を後援し、また会員相互の親睦をはかることを目的とする。

（会　員）

第三条　本会は次に定める者を以って組織する。

一、教授の推薦により学位を授与された者および現に研究指導を受けている者。

二、その他、現教室関係者および第二条の主旨に賛同し、幹事会で承認された者。

（事務局）

第四条　本会の事務局は東京医科大学薬理学教室内に置く。

第二章　機関および会議

（総　会）

第五条　総会は定期総会および臨時総会とし、定期総会は毎年一回、臨時総会は幹事会が必要と認めたとき会長が召集する。

総会は、㈠会務報告および会計報告の承認、㈡年度事業計画の承認、㈢その他会則の変更等を議決する。

（会長、副会長および監査）

第六条　本会に会長、副会長各一名および監査二名を置く。

会長には主任教授を推戴する。

会長は本会を代表して、会務を統括する。

副会長は会長の指名による。会長を補佐し、会長に事故あるときはその職務を代行する。

監査は幹事会に於て幹事の互選により選出し、会計を監査する。

（幹事および幹事会）

第七条　本会に幹事若干名を置く。

幹事の任命は会長の指名による。

幹事会は会長が必要と認めたとき召集する。

幹事会は総会に附議すべき案件、その他本会の運営に必要な事項を審議する。

（会　計）

第八条　本会に会計幹事二名を置く。

会計幹事は会長の指名による。

会計幹事は本会の会計を主務する。

監査は、会計を監査する。

（役員の任期）

第九条　役員の任期は二年とする。但し再任を妨げない。

（名誉会長および顧問）

第十条　本会に名誉会長および顧問を推戴することができる。

名誉会長および顧問は幹事会において選考し、総会の承認をうけるものとする。

第三章　本会の事業

（事　業）

第十一条　本会の目的を達成させるため次の事業を行う。

一、会報の発行

二、薬理学教室における研究の援助

三、教授の推薦による優秀研究者の表彰

四、その他

第四章　会　計

（経　費）

第十二条　本会の経費は・会費、賛助金、その他の収入をもってこれにあてる。

（会　費）

第十三条　本会の会費は学位保持者は年額一万円とし、その他の会員は一千円とする。

会員は、各年度の定期総会時に会費を納入するものとする。

（会計年度）

第十四条　本会の会計年度は毎年一月一日にはじまり十二月三十一日に終る。

附　則

本会則は、昭和五十五年一月一日から施行する。

旧会則は、昭和五十四年十二月三十一日までとする。

巻頭言

渋谷　健

三緑会が発足して、今年で五十八年目になる。われわれの三緑会の命名は教室の創設者である恩師原三郎先生であることは言を待つまでもない。その原先生も満八十七才にあと九日を残して茂子夫人の誕生日を祝ったあとすぐ故人になられ、この六月十九日で一周忌を迎えることとなった。その上、茂子夫人も約五ヶ月後の十一月六日満八十一才で先生のあとを追うごとく、逝去された。弟子にとって両親を亡くしたように感じられてならない。淋しい限りである。

先生は常々「長寿は最高の芸術である」と話されたが、その話しぶりが昨日の如く思い出される。先生にはせめて、本年末完成の新病院の開院式には御出席いただきたかったし、来年三月十七日の創立七十周年記念式典で唯一の創立者代表として出席され、創学の精神を話していただきたかった。何としても残念で致方ない。

茂子夫人は先生の意志を尊重され、家屋敷を含むすべての財産を大学に寄附されたが、数億円になろう。このような巨額の寄附は、学祖高橋琢也先生が本学創立に際し私財をなげうって創設されて以来、はじめてのことである。先生の本学に対する愛着が如何ばかりであったか、察するに余りある。「有言実行」とは正にこのことを言うのであろう。

先生は常々、薬理学教室の発展を望まれ、また、本学図書館の貧弱な姿をなげいておられたが、近い将来、先生の御寄附を基金として、必ずや実現されるであろう。私は、先生の遺言執行者として、心なき者が先生の御遺志をないがしろにしないようしっかりと監視するつもりであり、また大方の御理解を得たいと思っている。

さて、今年の三緑会総会は、はからずも先生の御命日に行うことになった。この機会に「三緑会」の名称の由来について新しい会員に説明しておきたい。

三緑会の「三」は三つの世代、すなわち、若年、壮年、老年が一つになって生きて行こうという意味と、三郎

の三をとったと解される。このうち老年については約三十年前「熟年」とおきかえられた。次に「緑」は何時までも若々しくとの意味のほかに、本会が発足した当時、先生のお住いのあたりを緑が丘と呼んでいたのでそれをとったともいわれている。このような意味をもつ三緑会は、後進が先輩の伝統を受け継ぎ、発展してこそ意義がある。

私は教室は永遠であり、教室で学んだ者は皆同胞であり、運命共同体の一員として力を合せてお互いに協力して発展していくべきものと思っている。

三緑会会員は原先生時代に育った先輩あり、私の代で勉強した者もいるが、時代こそへだたりあるも、精神は皆同じであることを確信する。本会を母体とし、結束してこそ、原先生の御遺志も生きてこよう。本会に対する会員諸氏の御理解と御援助を切にお願いする次第である。

原三郎先生一周忌に当り
ご夫妻を偲んで

伊能秀記

原三郎先生が、昨年の五十九年六月十九日にご逝去になりましてから、早くも一年が過ぎました。先生のあとを追うようにして令夫人茂子様も十一月六日亡くなりました。

この年月の慌しい様が、今更のように思い出されます。心安らけくご入院中のことが、今も廊下を通るたびに脳裏をかすめます。

大学病院の六階、特別室にご夫妻が枕を並べて、お子様がおられず、ご高令でもありましたので、お淋しいのではないかと言う気持が、われわれ門下の心にいつもあったのですが、ご夫妻ともさらりとされていてそのようなご様子は全く表には現わされることはありませんでした。つねづね渋谷教授にすべてを委せてあると言いきられておりました。私は昭和十年からの半世紀に近い永い間ご指導をいただきましたが、一度も病臥されたことはありませんでした。八十才を越した晩年に入って入院をされました。創立時の学生委員として奮闘され、卒業後大学に勤務された最後の一人として、常に純粋に燃ゆるような情熱をもって大学のことを考えられました。卒業式、入学式等における音吐朗々たる創学の精神を説かれたあのご挨拶はもう二度と聞くことはできません。

先生が独りでご入院の間は非常に奥様のご自宅でのご様子を案じられ、しばしば口にされ、早く退院させよと度々お叱りをいただきました。

原先生のご逝去に際しては、原家と薬理学教室合同による通夜、告別式並びに大学葬が執行されました。稲垣理事長、松尾学長両先生を初め、大学の教職員の皆々様、各種関係団体のご高配を心より深謝し厚く御礼を申し上げます。

又、渋谷教授、堀部助教授以下教室員のご苦労に対し感銘を深くしております。

奥様は大学葬には、なんとしても参列されたいと言われ、食欲も進み元気になられ運搬車に乗られ、伊藤(久)教授と婦長さんの看護の許で式場に出られました。予定の時間を超過され、喪主としてのご焼香を立派に済まされて帰院されました。

その強いご意志には、関係の者が皆びっくりしました。

その奥様も終に十一月六日ご逝去になりました。奥様の告別式の日に、「原三郎の人と足跡」の立派な評伝の一冊を書かれた川原利也君が逝去されました。

尚、奥様のご逝去後、下北沢のご自宅や殆どの財産を大学にご寄附になりましたことを附記させていただきます。

ここに会員の皆様とともに

瑞鐘院殿医翁歌博三郎大居士

瑞麗院歌室浄茂清大姉

の両霊位のご冥福を祈り上げます。合掌。

三　緑　会　会　計　報　告

昭和59年 6月 1日より昭和60年 5月末日までの会計報告は，下記の通りです．

収入の部

項目	金額
前年度繰越金	¥ 292,081
預金利子	¥ 5,809
三緑会年会費	¥ 10,000
寄附金（楊先生より）	¥ 14,173
定期預金解約（原家葬儀準備金）	¥ 1,022,687
原家葬儀立替金戻金	¥ 1,022,687
合　計	¥ 2,367,437

支出の部

項目	金額
事業費	¥ 0
事務費（三緑会会報）	¥ 120,800
学術活動	¥ 0
慶弔費（生花代）	¥ 295,000
謝　金	¥ 0
原家葬儀費用立替金	¥ 1,022,687
繰越剰余金	¥ 928,950
合　計	¥ 2,367,437

項目	金額
昭和59年12月末残高	¥ 928,950
内訳　現　金	¥ 0
普通預金	¥ 928,950
定期預金	¥ 0

教室近況

一、人事移動

昭和五十九年六月十九日以降の人事異動は左記の通りです。

一、入室者

○周　明勇（研究生、昭和五十三年中山医学院歯学部卒）
○増田幹生（専攻生、昭和五十九年東京医科大学卒）
○志村容生（研究生、昭和五十八年東海大学医学部卒）
○柄澤英一（専攻生、昭和五十三年帝京大学医学部卒）
○川越康子（技　手、昭和六十年東京薬科大学卒）
○辻　裕子（技　手、昭和六十年北里大学薬学部卒）

二、異　動

○渡辺泰雄（昭和六十年一月基礎研究員より助手）
○佐藤勝彦（昭和六十年十月講師より助教授）

三、退室者

○渋谷裕史（専攻生、東京医科大学内科へ転科）
○佐々木珠美（技　手）
○本間隆行（大学院、東京医科大学外科専攻生へ転科）
○三浦久美子（技　手）

二、研　究　活　動（昭和五十九年六月〜昭和六十年五月）

㈠　著書　渋谷　健（分担執筆）

薬剤使用上の諸問題 ― 与薬と看護、看護MOOK №12、金原出版(株)（一九八四年十月）

㈠　学会発表等

(1)　国内発表

○Ca^{++}拮抗薬の降圧作用と生体amine

洪　永隆、○佐藤勝彦、施　宏哲、佐々木珠美、渋谷　健

昭和五十九年六月　第七十回日本薬理学会関東部会（東邦大学・薬学部）

○脊髄損傷ラットにおける薬物の脊髄反射活動電位に及ぼす影響（第三報）

○松田宏三、三浦久美子、遠藤任彦、渋谷　健

昭和五十九年九月　第十四回精神薬理研究会年会（名古屋保健衛生大学・医学部）

○Benzodiazepine の作用機序、生体amine とGABA

○佐藤勝彦、洪　永隆、施　宏哲、佐々木珠美、青木　誠、渋谷　健

○異種向精神薬投与マウス間の干渉現象に関する薬理学的研究（第一報）

○松田宏三、三浦久美子、遠藤任彦、渋谷　健

○LA activity meter による薬物感受性に関する行動薬理学的研究 ― ことに個体間干渉効果について ―

○堀部眞廣、石井　巖、山田博一、林　正朗、渋谷　健

昭和五十九年十月　第七十一回日本薬理学会関東部会（横浜市大・医学部）

○薬物感受性と個体間干渉効果に関する行動薬理学的研究

堀部眞廣、○石井　巖、道永啓以智、林　正朗、渋谷　健

○実験的関節炎発症ラットにおける諸種抗炎症薬の効力評価に関する行動薬理学的研究

○林　正朗、堀部眞廣、石井　巖、林　秀憲、渋谷　健

○麦角アルカロイド誘導体殊にBromocriptineの行動薬理（第一報）
○松田宏三、三浦久美子、渋谷　健
昭和五十九年十一月　第十二回実験潰瘍懇話会（東京医科大学・内科）
○Benzodiazepine の実験的 stress 潰瘍に対する薬理学的効果、特に胃壁内 amine の蛍光組織学的検索
猿原孝行、○佐藤勝彦、施　宏哲、原　一恵、渋谷　健
昭和六十年三月　第五十八回日本薬理学会総会（東京慈恵会医科大学）
○実験的関節炎発症ラットにおける行動薬理学的研究
○林　正朗、堀部眞廣、石井　巌、林　秀憲、渋谷　健
○薬物感受性と個体間干渉効果に関する行動薬理学的研究
堀部眞廣、○石井　巌、道永啓以智、林　正朗、渋谷　健
○諸種向精神薬投与マウス間の干渉現象に関する薬理学的研究（第二報）
○松田宏三、三浦久美子、渋谷　健
○麦角アルカロイド誘導体殊にBromocriptineの行動薬理（第二報）
○三浦久美子、松田宏三、渋谷　健
○Ketanserin tartrate（KJK−945）の中枢作用に関する薬理学的研究、殊に生体 amine 及び EEG の変動解析を中心として
○施　宏哲、佐藤勝彦、洪　永隆、原　一恵、青木　誠、猿原孝行、渋谷　健
昭和六十年六月　第七十二回日本薬理学会関東部会（順天堂大・医学部）
○Tifluadom のラット胎生期及び新生期連続投与時に見られるbenzodiazepine opioid receptor subtypes の変化
渡辺泰雄、志村容生、今西信幸、B. Salafsky、渋谷　健
○実験的脳虚血動物に及ぼすVinpocetine の影響—脳内monoamine の組織化学的検索を中心として—
佐藤勝彦、青木　誠、施　宏哲、洪　永隆、原　一恵、渋谷　健

昭和六十年六月　第四回Ca拮抗薬研究会（大阪）

○Ca拮抗薬の降圧作用と生体amine

洪　永隆、佐藤勝彦、施　宏哲、渋谷　健

昭和六十年九月　第十五回日本神経精神薬理学会（京都大学・医学部）

○実験的関節炎発症ラットにおける行動薬理学的研究（続報）

林　秀憲、林　正朗、石井　巌、堀部眞廣

○薬物感受性と個体間干渉効果に関する行動薬理学的研究（続報）

石井　巌、堀部眞廣、林　正朗、渋谷　健

○中枢神経benzodiazepine receptor のsubtypesの比較

渡辺泰雄、B.Salafsky、S. Khatami、原　一恵、志村容生、渋谷　健

○末梢の電気刺激による鎮痛効果と脳内monoamine の関与

青木　誠、　佐藤勝彦、施　宏哲、渋谷　健

○諸種向精神薬投与マウス間の干渉現象に関する薬理学的研究（第三報）

松田宏三、渡辺泰雄、松永寛幸、渋谷　健

(2)　国外発表

昭和五十九年八月　第九回国際薬理学会議（ロンドン）

○ Pharmacological Effects of Suriclone on Experimental Stress Gastric Ulcer with Special Reference to Fluorescent Histochemical Study on Amines in the Gastric Wall

○ T. Shibuya, K. Sato, Y. L. Hong, K. H. Chang and K. Matsuo

○ Antiepileptic Effects of Globulin－N as an Intact Human Immunogloblin and its Tissue－Distribution in Kindled Cats

○ H. Hirayama, T. Kurimoto, S. Wada, S. Shoji, N. Machida, H. Harada, M. Horibe and M. Ariizumi

○ Preclinical Evaluation and Pharmacological Consideration of Some cases of Classic Prescription of Oriental Chino－Japanese Herb Medicine Especially the Stand Point of Coordination with Drugs Action on the CNS with the Limbic Hippocampal after Discharge Analyzed by EEG Berg－Fourier Analyzer(BFA)

○ M. Horibe, I. Ishii, H. Yamada, S. Taira, M. Hayashi and T. Shibuya

○ Effects of Prenatal diazepam on Maturation of Response to Pain and Startle

Y. Watanabe, ○ T. Shibuya, B. Salafsky and H. F. Hill

昭和五十九年十月　The 14th Annual Meeting Society of Neuroscience （カリフォルニア）

○ Effects of Repeated Treatment of Pentylenetetrazole on Motor Activity and Opiate Receptors in Rat

○ Y. Watanabe, T. Shibuya, S. Khatami and B. Salafsky

昭和五十九年十一月　アジア薬学大会（於台北）

○ Pharmacological Studies of "San－Huang－Hsieh－Hsin－Tang" in Rats

○ Ming－Tsuen Hsieh, Ho－chan Chen, Don Iun Lai and Takeshi Shibuya

○ Hemodynamic Effects of "San－Huang－Hsieh－Hsin－Tang" in Patients with Essential Hypertension

○ Ho－Chan Chen, Ming－Tsuen Hsieh and Takeshi Shibuya

○ The Effects of Clobazam and Diazepam on Central GABAergic System

○ Ming－Tsuen Hsieh and Takeshi Shibuya

昭和六十年十月　The 15th Annual Meeting Society for Neuroscience（ダラス）

○The Interaction Between GABA/BZP and Opioid System in Spinal Cord

T. Shibuya, Y. Watanabe, T. Matsumiya, B. Salafsky

(3)　特別講演および特別講義

昭和五十九年十二月　Univ. of Ill., College of Medicine at Rockford

○Some Recent Advances in Pharmacology Alzheimer's Disease

(4)　原著・論文の研究業績

○消化性潰瘍発現のメカニズムとBenzodiazepine derivativesの薬理効果
— 特に水浸拘束ストレスを中心として —　（片山　壽）
東京医科大学雑誌第四十二巻第二号P二〇九～二一九（一九八四）　昭和五十九年三月

○Differential Postnatal Ontogeny of Opiate and Benzodiazepine Receptor Subtypes in Rat Cerebral Cortex: Binding Characteristics of Tifluadom and Brotizolam
Harlan F. Hill, Yasuo Watanabe and Takeshi
Japan. J. Pharmacol. Vol. 36 P十五～二一（一九八四）

○各種浮腫性疾患に対するSK－110(Azosemide)の臨床評価 —Furosemideを対照薬とした多施設二重盲検群間比較試験—　（渋谷　健他）

○向精神薬をめぐって　（風祭　元、渋谷　健、町山幸輝、筒井末春）
医学のあゆみ一三〇巻一号P七〇～九四　昭和五十九年七月七日号
CLINICAL NEUROSCIENCE 二巻八号P九二～一〇四（一九八四・八・一）

○The Effects of Clobazam and Diazepam on Central GABAergic System
Ming－Tsuen Hsieh, Takeshi Shibuya and Ho－Chan Chen
Journal of the Taiwan Pharmaceutical Association 三十六巻四号P一八七～一九五（一九八四・十二）

○Ontogenic Properties of Benzodiazepine Receptor Subtypes in Rat Spinal Cord
Yasuo Watanabe, Takeshi Shibuya and B. Salafsky
European Journal of Pharmacology. Vol. 109 P三〇七～三〇九（一九八五）

○Kallidinogenase製剤の臨床効果ならびに適正用量に関する検討 ―並列群間二重盲検法による多施設臨床試験―

（武内重五郎、大友英一、谷口興一、田中恒男、渋谷　健）

医学と薬学十三巻一号P一二五～一四二　一九八五年一月（自然科学社）

○Fluorescence histochemical studies of the effects of rauwolfia alkaloid derivatives on adrenergic vasomotor nerves

T. Shibuya and K. Sato

Int. J. of Clin. Pharmacol. therap and toxicol 二十三巻一号P五～十（一九八五）

○Pharmacological studies of the central action of zopiclone: effects on locomotor activity and brain monoamines in rats

H. J. Liu, K. Sato, H. C. Shih, T. Shibuya, H. Kawamoto and H. Kitagawa

Int. J. of Clin. Pharmacol. therap and toxicol. 二十三巻三号P一二一～一二八（一九八五）

○Pharmacological studies of the central action of zopiclone: influence on brain monoamines in rats under stressful condition

K. Sato, Y. L. Hong, M. S. Yang, T. Shibuya, H. Kawamoto and H. Kitagawa

Int. J. of Clin. Pharmacol. therap and toxicol. 二十三巻四号P二〇四～二一〇（一九八五）

○Zopicloneの中枢薬理学的研究　―ラット自発運動と脳内monoamineにおよぼす影響―

（劉　鴻栄、佐藤勝彦、施　宏哲、渋谷　健）

東京医科大学雑誌四十三巻一号P三十五～四十三（一九八五）

○Zopicloneの中枢薬理学的研究　―Rat stress負荷時における脳内monoamineの検索―

（佐藤勝彦、洪　永隆、楊　美雪、渋谷　健）

東京医科大学雑誌四十三巻一号P四十五～五十一（一九八五）

○Amantadineのラット自発運動と脳内monoamineにおよぼす影響

（佐藤勝彦、劉　鴻栄、施　宏哲、洪　永隆、青木　誠、松尾喜美子、渋谷　健）

東京医科大学雑誌四十三巻二号P一八三～一九一（一九八五）

○Studies on the Intraarticular Pressure of the Knee

Kazuhiko Inoue

J. Tokyo Med. Coll.　四十三巻二号P一九三～二〇五（一九八五）

○脳循環動態作働薬に関する薬理学的研究　―Vincamine誘導体vinpocetineのラット脳内monoamineに及ぼす影響―

（張　光雄）

東京医科大学雑誌四十三巻二号P二〇七～二二〇（一九八五）

○Bromocriptineの連続投与時におけるマウス脳内monoamineの変動と、脳内catecholamine代謝回転におよぼす影響

（松尾喜美子）

東京医科大学雑誌四十三巻二号P二二一～二三一（一九八五）

○Pharmacological Studies on Brotizolam, a Thienotriazolodiazepine Derivative with Special Reference to Central Nervous System and General Pharmacology

Katsuhiko Sato, Hiromi Matsuda, Masaaki Hayashi and Takeshi Shibuya

東京医科大学雑誌第四十三巻第四号P六四九～六六〇（一九八五）　昭和六十年七月

○Pharmacological Studies on Brotizolam(We 941), a Thienotriazolodiazepine Derivative

―Effect on rat behavior and brain monoamines―

Katsuhiko Sato, Hung Jung Liu, Takayuki Saruhara and Takeshi Shibuya

東京医科大学雑誌第四十三巻第四号P六六一～六七二（一九八五）　昭和六十年七月

○Ethyl loflazepate(CM 6912)及びその代謝産物の薬理学的研究、一般薬理作用

（佐藤勝彦、施　宏哲、猿原孝行、青木　誠、原　一恵、渋谷　健）

東京医科大学雑誌第四十三巻第五号Ｐ八五八～八六六（一九八五）　昭和六十年九月

○Benzodiazepine系化合物の薬理学的研究、殊にPro-drugとしてのEthyl loflazepate の作用機序

（道永啓以智）

東京医科大学雑誌第四十三巻第五号Ｐ八六七～八七四（一九八五）　昭和六十年九月

○カフェインの薬理作用

（渋谷　健、原　一恵）

医薬ジャーナル第二十一巻第九号Ｐ七九～八三（一九八五）　昭和六十年九月

○The "status quo" of clinical pharmacology in Japan

T. Shibuya

Int. J. of Clin. Pharmacol. therap. and toxicol. 二十三巻七号Ｐ三三三～三三八（一九八五）

三、学位（医学博士）取得者（学位論文題目）

井上和彦

Studies on the Intraarticular Pressure of the Knee　昭和六十年二月

松尾喜美子

Bromocriptineの連続投与時におけるマウス脳内monoamineの変動と、脳内catecholamine代謝回転におよぼす影響　昭和六十年二月

道永啓以智

Benzodiazepine系化合物の薬理学的研究、殊にPro-drugとしてのEthyl loflazepate の作用機序　昭和六十年十月

原　三郎・茂子御夫妻を偲ぶ会

日時　昭和六十年六月十九日　午後六時半
於　東京ヒルトンインターナショナル

伊能秀記先生

本夕は故原三郎先生の一周忌の法要と合せまして、茂子令夫人お二方を偲ぶ会を催しましたところ皆々様に置かれましては、公私共にご多端な中をご参集賜りまして、誠に有難く心から厚く厚く御礼を申し上げる次第でございます。

先生は昨年の六月十九日にご逝去になりました。二十一日、二十二日と御通夜、告別式が新宿の太宗寺で行われました。これは原家と薬理学教室の合同葬でございました。また、七月二十一日には大学葬を大学の記念講堂で執行して頂きまして、多数のご弔問の方のお出でを賜りました。厳粛の内にも盛大に式が終了致しました。葬儀、告別式共々誠に盛大でございまして、ご遺族の方々はもちろん薬理学教室関係の方々も大変に感謝申した訳でございます。しばらくたちまして、十一月の六日に茂子夫人がお亡くなりになりました。七日、八日と御通夜、告別式が太宗寺で執り行われた訳でございます。この一年は誠に慌しく過ぎ去った一年でございまして、誠に感慨深いものがございます。これらのご葬儀に際しましては、ご鄭重なるご弔意、ご芳志を賜りましたことを厚く厚く御礼申し上げる次第でございます。また、ご夫妻がご入院中、主治医の大井鉄太郎教授、伊藤久雄教授、医局や看護婦さんの方々の誠にご懇切な治療、看護を賜りましたこと、改めて厚く感謝申し上げる次第でございます。

原先生は入学式、卒業式、その他式典等におきまして、いつも音声朗々と本学建学の精神または苦難の歴史等をお話になりまして学生の諸君や、若い卒業生の方達に深い感銘を与えたことと思われますが、もうその声は聞くことはできません。先生ご夫妻は、平素は非常にご健勝で、仲睦まじくお過ごしでございました。特に原先生におかれましては私の記憶ではほとんど病気でお休みになった記憶がございません。しかし、晩年になられましてからは、さすがにお弱りになりまして、ご承知の如く、ご夫妻で枕を並べて同室にご入院になるということになった訳でございます。我々同門が常に案じておりましたことは、ご承知のようにお子様がお出でになりません

ので、晩年は、さぞかしお寂しいであろうということを常々皆々と話しあっておりましたのでございますが、私が端的に伺いましたこともありましたが、先生がおっしゃいますことには、「僕は一切を渋谷教授に委ねてあるから僕は少しも心配することがないんだ」とはっきりおっしゃいました。実際にお見舞下さいました皆様方もご覧頂いたと思いますが、ご入院のご様子は誠に朗らかで、明るくて、常々先生は相変らず大きな声でお話をなさるし、奥様も静かに微笑んでおられる。お部屋はいつもお花の匂いで満々ているという誠に穏やかな平安な状況の中でご闘病の生活をされておられました。我々と致しましても非常に安心した次第でございます。渋谷教授は実の子供さんより以上に非常によく先生にお尽くしになられまして、特にこのお亡くなりになりまして、先生、奥様のあとそれぞれの間の期間が短うございますので、いろいろとご葬儀のこと、また墓所がその当時は出来ておりませんので、それらの建設・造設と申しますか、その他、またご遺言の処理、これもなかなかいろいろと大変でございましたが、これらにつきましても力を尽くされまして、ご夫妻のご遺志の通りに全てを実現されていかれたのでございます。

原先生のご遺言によりまして、下北沢のお屋敷を含めまして膨大な遺産をほとんど全て大学に寄附されたわけでございます。先生の六十年に及ぶ長い東京医科大学との同じ歩みがここに寄附ということによってはっきりとピリオドを打たれた訳でございまして、私共も非常にこの先生の大学と共に生きぬくという普段おっしゃっていた言葉がそのままそこに実現されましたものをみるような心地が致しました。誠に爽かな五月の薫風をかぐような爽かな、そして、深い感情を持った訳でございますが、しかしこれはまた原先生の独特のご環境によって成し得たことであろうと存じております。

今日は沢山の方々にお出で頂き、しかもいろいろの方面から原先生を思い出してこれからお話を頂く予定になっておりますので、宜しくお話を賜りまして、私共もご夫妻を偲ばせて頂きたいと、こうして頂けますれば大変有難い次第だと存じております。どうぞ本日は、お寛ぎ賜りまして、ごゆるりと思い出話などをお聞き下さいましてご夫妻をお偲び願いたいと、かように存じております。どうぞ宜しくお願い致します。

これをもって御挨拶と致します。どうも有難うございました。

岩尾泰次郎先生

只今ご指名に預かりました岩尾泰次郎でございます。不肖私は原先生の一番弟子でございまして、最も出来の悪い男でございました。しかしながら、年は遠慮なく取りまして、原先生より一つ若くて八十八才になりました。昔から老人には歴史ありという言葉がございますが、原先生の八十七年に亘る生活の中から、皆様が御聞きにならなかったような二、三の問題をお話してみたいと存じます。さて、東京医科大学の創設は遠く、大正七年四月十三日だったと、私は記憶しております。そして、この大学の建学の精神の中に、自主自学、友愛、正義、奉仕と、この五つの精神を折込んだ建学の精神というモットーがございます。このモットーの作者は誰でありましょうか、この創作こそ原先生によるものであるということを、私はここで皆様に御披露しておきたいと存じます。この建学の精神によりまして、今日の東京医科大学の権威が堅持されているわけでございます。先生は学生の教育に、あるいは生活の指導の上に、この建学の精神をもって終始一貫した、そうして、この強靱な実行者の第一人者でありました。私は原先生が最後の人でないことを望んで止まない次第でございます。

第二の問題は、薬理学会における先生の貢献でございます。これは大正十二年に先生がヨーロッパの留学からお帰りになりまして、私が勤めておりました細菌学教室の下に、一部屋を設けまして、大学の非常に貧困な財政の中から、新しい教室の開設でございますから、先生は私財を投げ打って、ある程度設備を整えられたと、私は聞いております。そうしてその教室で、いろいろな、例えば希土類金属の薬理学的研究とか、あるいはビタミンCの研究を発表された。而して当時の薬理学会を驚かしたのでございます。そうして、日本薬理学会の華々しいスタートの時代でございました昭和の初期、三、四年頃からでございますが、日本の薬理学会に四天王という名称がございました。お古い方は思出して頂けると思いますが、東大の林春雄教授、京都大学の森島庫太教授、慶応の阿部勝馬教授、それと、我が東京医大の原三郎教授でございます。当時こういう偉い人のそばには、我々研究者はセイガイにも触れ得なかった時代でございます。私の記憶に未だ残っているのは、東大にも私は参りまし

たが、林教授は素晴らしい鼻髭を、生やしておりまして、とてもとても怖い先生でございました。原教授は若くて、人当たりが良くて、研究生からは、非常に尊敬もされ、親しまれた。私は、特に御厚誼にもなっていたのでございます。この薬理学教室の後を継がれた、今、司会をなさっています渋谷教授、教授は原教授の教え子でございます。大変失礼な引用でありますが、藍よりいでて、藍より濃いという言葉がございますが、原教授に劣らず世界的な学者であります。そして日本だけでなく、イリノイ大学の薬理の教授もやって、飛行機であっちこっちと、飛び回っていますから、私は老婆心ながらもう少し日本で有名になって欲しい、とよく言っております。まあ原教授は、御安心なさって、あの世に行っても差し支えないと、私は確信しております。

それからもう一つは医家芸術の問題でございますが、先生の第二の人生は医家芸術の発展のために非常にご苦労なさったことと思います。私は、式場隆三郎先生と同じ年に生まれました。あの偉い先生は、もう早くに亡くなられまして、私は未だ生きのこっていますが、創立当時から相談相手になりまして、私は、下手な写真で委員をやっております。その際、どう考えても原先生は私が御紹介して、入ってもらった人ですが、御自分はそういうことは言いませんよ。俺が一緒に式場君とやっちゃったんだよ、と主張するのです。ああそうですね、と私は言わざるを得なかった。その医家芸術の中における活動は、それは素晴らしいものでございました。幸いここには副委員長をなさっておられます菅博士がおいでになっていますから、そのお話は菅博士にお願いしたいと存じます。

それからもう一つですね。先生があれだけ念願して、その目的を達し得なかった問題が一つあるのです。それは、常日頃、どうもうちの大学は図書館が貧弱であること、学問の中枢は図書館であること、こんな図書館では、しょうがないということを口癖のようにおっしゃっておられました。只今、伊能博士から御聞き致しますと、原先生の全財産を大学に寄附なさるというお話、また、大学の財団には、やはり教え子でありまして、賢明な稲垣理事長が、ここにお出でになります。それから伊能博士が、やはり常務理事としていらっしゃいます。私はこういう方々にお任せしておけば、大丈夫だと思いますが、願わくは、原記念図書館というようなものを建てて、大

学と共に永久に保存したいと念願しているものでございます。

いろいろとお話したいこともございますが、今日は、原先生が生前非常に敬愛しておられました御友人の方、あるいは先輩の方、また教え子の方が、沢山お集まりになっております。どうか原先生、大学の方は御心配なく。安らかな黄泉の旅を続けて頂きたいと思います。

幸いここには、先生が生前非常に楽しくお飲みになった美酒もございますし、皆が本当に先生の御冥福を祈っていると思いますで、大変長い御挨拶でございましたけれども、皆様と御一緒に先生の安らかな御冥福を祈念致しまして献盃致したいと存じます。どうぞ献盃の御唱和をお願い致したいと存じます。

「献盃！」　有難うございました。

理事長　稲垣赳夫先生

本日は、原先生御夫妻を偲ぶ会・一周忌ということで、かねて非常にお丈夫であった原先生がお亡くなりになって、もうすでに一年というので驚いているところでございますが、先生と御夫人は数ヶ月を経ずして、共にお亡くなりになったということで、その因縁の深さに感じ入っている所でございます。

本学、いわゆる原先生の非常に心血を注いだ大学の後を受け持った後輩と致しまして、原先生の思い出をごく簡単に二、三申し上げたいと思います。

先生は、皆様御承知の通りに、大学創学の元老のお一人でございます。創学の元老であるだけでなく、その創学の事情、創学の精神というものを倦まず後輩に語られた、いわゆる語部としての役割をなさった方でございます。その意味においては、我々は、毎年いわゆる入学式に新入生を迎えた時に、原先生のお話を承ったわけでございますが、毎年毎年繰返されるお話で、その間の事情はわかったというふうに簡単に考えたこともあったのでございますが、そうではなくて、やはり創学のあの苦労を語られた心情を、真に理解しなければいけないと思いました。それは、後からみれば、とにかく大学ができたのだというので、予定の行動で大学が出来たというふうに皆考えがちですが、後からみての話でございまして、当時の当事者にとっては、果して学校ができるかどうかということに非常に不安があったわけでございます。その不安の中を押して、努力をして、ついに建学をしたということの心情は、後輩に語らざるを得なかったと、繰り返し繰り返しお話するのはもっともだ、というふうに我々は理解したわけでございます。

それから、原先生の御功績は、大学に薬理学教室、専攻の薬理学教室を創建されて、渋谷教授を初めとする多くの優秀な人材を、後継者を育てて頂いたということでございます。先程来お話があった通りに、薬理学会における、いわゆる実力者として、東京医科大学の薬理学教室ここにありという存在を示されたのが、これは大学にとっての大きな貢献であったと存じます。現在、その後を継がれた渋谷教授が、益々世界的な学者として活躍し、

東京医大の薬理学教室の存在を示しているということは、原先生の非常にお喜びになっていることと存じます。

最後に先生は、その一生を捧げられた大学に、その自らの遺産の全てを寄附されたということでございます。先程お話があった通りに、その数億に及ぶ資産を全部大学に寄附されたということは、今までにないことでございます。先生が営々として、その創学からその発展を導いてきた大学のために、自己の遺産全てを御夫妻の御遺志で大学に寄附頂いたということでございまして、この点は大学としては一生を通じて大学に尽くされた先生の御功績の最後の終結だということで非常な感銘を受けているところでございます。先程図書館の話が出ましたが、図書館はこの原先生の御遺産の全てを投じて、これを基本にして、将来、大学の図書館を拡充強化していくということを考えているものでございます。その点は、大学もいろいろな事情が多くございまして、現在直ちにいうわけには参りませんが、必ず将来には先生の御遺志を生かして原記念図書館の建立をしたいということをここで明確に申し上げまして、御報告と致します。

学長　松尾治亘先生

原先生には学生時代に薬理学を教えて頂いたのはもちろんでございますけれども、先生は私の恩師である馬詰先生とは、学生時代からの親友で、しかも、共に大学に残られて、永い間本学の発展にお二人とも尽くされたわけであります。そういう関係から、私は卒業して眼科学教室に入りましたが、その時から先生は年中眼科学教室へいらっしゃいましたので、私はひよこの時から原先生には親しくお目にかかっていろいろと御指導を受けていました。

実は今日二つばかりお話ししようと思います。一つは先程からお話が出ていますけれど図書館のことであります。常々、原先生がおっしゃったこと、それから、他の大学の図書館長等から私が直接聞いたことは、本学の図書館は現在は非常に貧弱であると、誠に日本一貧弱であると、しかしあそこの中で働いている司書その他の方々はこれは日本一であると、しかも、インターナショナルであると、素晴らしい人がいるのに誠に残念なことであると、もっと立派な図書館を作れと、何をやってるんだ、ということを実は私は学長の立場からいつも恥しく今まで聞いてきたわけです。今日は、その中でいいことを原先生に御報告出来るということは、非常にこれこそ奇しくも天の配財だと思うのです。先生は晩年、その優秀なる図書館のある人を是非教育職員として遇せなくてはいかん、ということを強く要望なさいました。しかし、その当時先生が元気でいらっしゃる時には規則とかいろいろの関係で出来なかったのです。それが今年になって漸く出来るようになりました。私は先生のこの御遺志を継いでいるといつも思っているわけで、その中で今、理事長は将来図書館を立派に作るということを明言されましたけれども、これは原先生の残されたことによって出来るわけです。もう一つのこと、つまり図書館を今面倒見て下さっている人に対する処遇の問題です。たまたま今日は教授会がございまして、つい先程図書館の司書をやっております菅利信君を特任教授にすることを教授会で投票の結果これを可決することが出来ました。先生の一周忌にあたって、先生が切に希望されたことを教授会が認めて、そしてしかもその晩にここで先生に菅君が特任教授に

推薦されたことを御報告出来るのは、私の一番喜びとするところでございます。本当にこれで初めて、先生の残された遺言の中の一つを、やり遂せたと思うわけであります。原先生に長い間のいろいろな御恩義を被った中で、最後に先生が心に残された一つのことを、どうやらこれでやり得たということを報告出来るのでこんなに嬉しいことはございません。

もう一つは全く私事で口外すべきことではないかも知れませんけれども、随分昔の話ですから、これも一ついかにも原先生らしいお考えだということで、まあ一つのエピソードのようなものかも知れません。あるいはエピソードにならないかも知れません。約二十五年位前、私は私の師匠である馬詰教授から、お前はフランスへ行って勉強してこいと命ぜられました。もちろんお金はありませんし、大学だってそんな沢山のお金を出す余裕はありませんでした。その頃私学研修福祉会というのがございまして、そこから留学の補助金を頂くことが出来ました。そこでいよいよ留学が決まりましたので、もちろん原先生のところに御挨拶に行きました。先生はかつてフランスに留学されたこともございます。そうしたらば、おめでとうという前に、お前は人が座るべきところへ座ったのだと、お前はある人間がそこへ座るところをお前が占領したのだと、そういうことを忘れるんじゃないぞ、ということをまず最初に言われたわけです。私はその頃まだ未熟で、まあ今でも未熟ですが、愚かにも先生のおしゃっていることの意味がわからなかった。つまり留学するということで挨拶にいけば、そりゃおめでとうと、しっかり勉強して来なさいよ、といわれるのが普通だと思うものです。いきなりお前は人の座るところを占領したんだぞと、お前は人の邪魔をしたんだぞというような言い方でおっしゃった。これはまあ原先生一流の言い方であるわけですね。私は先生の真意を理解し得なかったということから、先生は何でこんな変なことをおっしゃるのだろうと思いました。実は内心、ずっと後まで原先生が何であんなことをおっしゃったのだろうということがわからなかった。しかし、それから大分経ってから、先生がおっしゃった意味は何かというとその私学研修福祉会でそうやって留学の補助金をもらう人は日本国内でもごく僅かしかいないわけです。その中にたまたま私が選ばれたということは他に沢山希望者があったにもかかわらずお前がそこへ選ばれたんだぞと、これは他の人も

そこへ座りたかったんだ、そういう席を欲しかったんだと、お前が座ったからにはそれなりに責任をもって、しっかりやれということに他ならないということが大分後になってからやっとわかったのです。原先生という方は物事を率直におっしゃる方であると同時に、しばしば難解であったということも皆様御承知であると思います。それをまともに私は個人的に受けまして、長い間先生のお言葉を考えながら、実は心の中で何故おっしゃったのか、どうして、何故、どこに本意があるのか、ということを実は永年苦しんでいたのです。これは私今日迄、誰にも言ったこともございません。自分の妻に言ったこともないし、ここで皆様に敢えて、先生の一周忌にあたって先生が私に与えられたそういう訓戒を思い起こして、自分自身がそれを理解できなかったことを非常に恥かしく思い、原先生に永い間いろいろ教えて頂いたことを思い出しながら、この点今後も、噛みしめてやって行きたいと思っております。

以上で私の御挨拶と致します。

維持会長　三宅　有先生

高い席から大変失礼致します。維持会の関係で早々と御指名という様な事になったかと思います。御存知の如く、原先生は大学の大黒柱、大学と共に歩まれた大先生でございまして、私如きが何か申し上げることはかえって失礼になろうかと思いますが、お許しを頂きたいと思います。

維持会が創設されましたのは昭和二十六年であります。その創設者のお一人が原先生でありました。この創設の意義は、東京医科大学史にあります如く我大学を如何にして維持して行くかということにあったかと思います。そのルーツをひもとく時、佐々先生、三輪先生のあと原先生が約三十年にわたりまして維持会長を勤められました。そして、今日のような不動の維持会をお創り下さいましたことがよくわかります。その御功績の大なること私は今、こゝに、何と表現したらよいかわかりません。原先生ご勇退の後、松尾先生が継がれましたが、学長に就任されました。その後私が仰せつかっているわけでございます。何と申しましても、原先生が大きな仕事をされているものでございますから、どうしたらいいか戸惑っているうちに一年過ぎました。去年の総会の後、日を経たずして先生がお亡くなりになられた。私が維持会長としての最初の仕事が、原先生の御葬儀であったと言うことで、誠に忘れ得ることのない、また残念なことでもございました。

先程来、いろいろのお話のある中で、未だ、出なかったようなことを申しのべさせて頂きたいと思います。丁度、原先生が日本学術会議にでてをられました頃のことであります。その頃、昭和三十四年以降でございますが、時々、原先生のお部屋に呼ばれました。「君、最近の麻酔の領域にこういう問題があるけれどもこういう研究はどうだね。」とか「これはどうかね」とかいろいろお尋ねになられました。私はその時お答出来ないことが沢山ございまして、教室に帰りましていろいろ文献を調べました。先生の言われましたことは日本ではどうか、外国ではどうかと、そのレベルはどの辺にあるのかと、そういうことを常に言われました。私はそれを一所懸命勉強させて頂きました。非常に今日の勉強の基になったと言うことをいまだに感謝申し上げております。

それからもう一つ申し述べさせて頂きたいことでございますが、ついこの間の日曜日、大学の同窓会、および維持会の総会が開催されました。来年は大学が七十周年にあたります。同窓会ではグリーン運動とかいろいろな事業を展開しております。維持会の方でもいろいろ相談致しました。維持会では来年は丁度三十五周年にあたるわけです。この機にあたり校歌を、石に刻む、いわゆる校歌記念碑を新病院内に建立してはどうかということになりましてこれをお図り申し上げましたところ、全員一致でご賛同頂きました。これは大学とも御相談申し上げまして、この記念碑は是非建てさせて頂くことになります。原先生を偲ぶ本日の会においてご報告申し上げる次第でございます。先生、安らかにお眠り下さい。

同窓会副会長　林　純　茂　先　生

同窓会会長の永井先生が、止むを得ないことで本日出席出来ませんので急拠ピンチヒッターとして指名されました。私は原先生が長く維持会長を努めておられました時に一度副会長を仰せつかって原先生の下で仕事をさせて頂きました。先程来いろいろの話がでましたので重複する点は避けますが、原先生は、非常になごやかそしてお酒が好きでございますが、非常に腹の底に心底、剛直と申しますか、本当にまっすぐ一本鉄の棒が通っておって、曲がったことが一切駄目と言うことでございました。維持会のところの話でも人の話をニコニコニコニコ聞いておられて、これは線路からはずれるぞという時は声を大にしてそれはいかんと発言される先生でございました。また理事会の折にも大学の顧問として御出席になっておりましたが、自分で納得のできない時は何回でもそれを質問して自分で納得がいって、初めてそれはよろしいと言うような結末をつけるという剛直な先生でございました。

先程理事長先生のお話に、語部という言葉がございましたが、本当に血判を押して、本学の創立を始めた元理事長馬詰嘉吉先生が先にお亡くなりになって、それでその血判に隣に書いてあった原先生もこの度お亡くなりになって一年も閲したと言うことでございました。折に触れ時に触れ、大学創立以来のいろいろな御苦心、大学の東京医大の精神そのものを語部として我々は、何かの折について聞いたわけでございますが、もうこのお声を聞くことが出来ません。今後だれが我々にあの情熱を、燃えた血液を注入してくれたようなことを、どなたがして下さるのかと思います。本当に先生にいかれてしまって我々はある目途を失ったような感じが致します。

その他の話はいろいろ出たので省略致しますが、あるいはまた同窓会の時に夜中に先斗町から電話がかかってきて「林、居るならすぐ来い」と京都でもって呼ばれたことなどございますが、今日は隣に奥様がおられるようなので、その話は遠慮しておきます。只残念なことは、新病院を先生にお見せすることが出来ない、これを非常に痛恨に思います。以上で終ります。

（文責　渋谷　健）

ガンセンター長　早田義博先生

原先生は亡くなられる前はお話もしつこくなりまして、特にお酒を飲まれますと言うと、大きな声でお話されていかにして途中でお話を止めて貰って頂くかということに我々は大分悩まされました。しかし原先生は、東京医大がん研究事業団が出来ました時に、とかく批判がございまして、その存続を危ぶまれましたのでございますけれども、原先生のおかげでがん研究事業団も立派になりまして、段々その存在価値を認められるようになりました。特に研究面では広く認められてもいいのではないかと思います。これも原先生が理事長をやられまして研究面を良く理解されておられたからそうなったのでありまして、深く感謝しております。

最後に原先生とお話といっては変ですけれども、原先生のお声を聞きましたのは私でございまして、放射線科網野教授とお二人でお見舞いにというよりもちょっと様子を見に行ったときのことです。そうすると原先生は突然起き上がられまして、私の手をしっかり握って、頼むぞと言われました。これが最後でございまして、頼むぞと言われましたので私はわかりましたと言いましたが、何を頼まれたか、がん研究事業団のことだろうと思いますけれど、まさか東京医大をお前に頼むぞと言うようなことは、とではないとは思いますけれども、私は両方の意味にとりまして、原先生最後のお言葉を実現すべく大いに頑張るつもりでいますし、また、頑張ってもいますけれども、先生の最後のお言葉を守りたいと思います。

病理解剖所見

佐々弘教授

会食の席上甚だ恐縮ではありますが、ご列席の多くは医学に関係の深い方々と思われますので内輪での事として病理解剖のお話をすることをお許しいただきたく存じます。

原先生の剖検は死後一時間三〇分で行なわれました。先程お話がありましたように、原先生は五年程前に膀胱の乳頭状腫瘍(移行上皮癌第二度)の摘除を受けておられますので、その後どうなっているかということの検索が先ず一つの課題でありました。結果はその部位に限局性の潰瘍性膀胱炎は見られましたが、膀胱の何処にも腫瘍の再発は有りませんでした。次に死因となった主病変でありますが、これは大方の考慮の外にあったと思われる、急速に拡がった所謂老人性結核でありました。両肺の大部分は軟化崩壊空洞化の傾向をもった乾酪性肺炎によって占められており、廻腸終末部には管内性進展の結果と考えられる結核性潰瘍もみられました。これらの病巣には部位によって差異はありますが、しばしば多数の抗酸菌が検出されました。更にこれに加えて全身の主要臓器には菌の血行性散布による結核性病巣が散在し、即ち肝・脾・リンパ節等広汎に粟粒大結節が多数みられ、これらの病巣にも少数ながら抗酸菌の証明されるものがありました。以上のような重篤な結核症の進展拡大は恐らく終末に近い時点でおこったものと思われますが、両肺上葉には被包された古い乾酪巣が少数ではあるが見出され、かなり以前から存在した肺の結核性病巣の再燃と推測されました。尚、膀胱の腫瘍摘除部位と思われる部分の潰瘍にも僅かながら結核を思わせる変化と抗酸菌がみられており、これがどのような由来なのかはこれまでのところ充分には説明がつきかねております。先生が残してゆかれた宿題のようにも思われました。

この他に廻腸終末部に近く小指頭大の結節性隆起性病変が見られました。これはカルチノイド腫瘍で、腫瘍性病変は漿膜直下迄達しておりましたが、それを超えての拡大や遠隔転移は認められませんでした。また、間質性肝炎、胃炎等もみられておりますが、時間の関係もあり、詳細は省略致します。

以上簡単でありますが、剖検の結果の大様を述べました。後進に対し身をもって最後の教えを残された名誉教授原三郎先生の学徳を憶い、先生御夫妻の御冥福をお祈り申し上げて終りと致します。

斎藤章一先生

薬理学会の原先生の御業績につきましては、これまでに縷縷御説明がありました。確かに先生はあの当時の薬理学会の四天王として大いに活躍されたのでございます。先程稲垣理事長から御説明がありましたけれども、その当時の薬理学会と言うのは現在のそれと大変違いまして、非常に盛んでした。皆様御存知のように昭和五、六年の頃、例の東大対慶応のビタカンファー事件という論争がございました。また終戦後、ネオジギタリス事件と言うのがございました。九大と東大がやったのでございます。これは終戦直後のことで、京都大学で総会が久し振り開催されましたが、この大論争で、学会が久し振り沸騰しました。その様な議論、ディスカッションがありますと、原先生はモデュレーターとして、東大、京大、慶応とか九大とか、そういう先生方の間に挟まれて、非常に御苦労なさったのであります。それが私にとって一番強い印象に残っております。

先生は皆様ご存知のように慶応薬理同窓の白桃会の会員としまして、毎年白桃会の総会に必ず出席され、いろいろと、我々のためにご指導、ご鞭撻を下さいました。話は尽きないのでございますけれども、戦後の一時期、白桃会が一時途絶えたことがございました。その時先生が率先されて、お亡くなりになった阿部先生の奥様のためにも開こうではないかと言われて、盛大に今でもやっているわけでございます。

私が一番原先生に、感心しておりますことは、この様に恩になった方に対して、礼を尽くすと言うことでございます。これは我々はなかなか真似の出来ないことでございますが、年に二回は阿部先生の奥様のところにお伺いして、礼を尽くしてお慰めすると言っておられました。私も拳拳服膺してやろうと思っておりますけれども、なかなか不肖の身で出来ません。しかし我々は、この様な偉大な原先生の遺徳を偲んで、これからも大いにやるつもりでございます。原先生は私が退官する時にわざわざお出席になり「菊花咲く日　をのこの一生　勵みたる君を讃えて　ひと集ひたり」という有難いお言葉を頂戴しました。一九八一・一〇・一七　三郎と書かれております。これが先生の私に対する最後のはなむけの言葉となりました。

細谷英吉先生

本日なぜここにまかり出たかという理由を申し上げたいと思います。

第一番目は今斎藤教授が言われましたように、原先生は白桃会の名誉会員、というか、準会員というか、準会長と言うか、そういうことでいつも白桃会にはお出で頂きまして、いろいろなことを、お話を伺ったわけでございます。何故かと申しますと、ここで皆様に今更こんなことを申し上げるのもおかしいのですが、お若い方もおられましょうから申し上げますが、先程先生の時代は三つに分けられると言うようなことがございましたが、初めの頃は原先生のところでなさった業績のかなりのパーセントは、慶応の教授会で学位論文の審査を致しておりました。従いまして、阿部先生がいわば主査と言う形であったわけでございます。阿部先生は非常にやかましい方でございまして、だいたい論文は七度直してもらわないと通らないという先生でございましたが、原先生のところからきた論文だけは全部右から左にお通しになったように私は記憶しております。この伝統をただ一人原先生だけが破られたということになりましょうか。あるいは逆に言いますと、原先生の方で教室の若い方々をきっと相当痛めたのではないだろうかとそういうふうにも思うわけでございます。私、阿部教授の後を継いだ者でございますが、とても阿部教授のように七度も論文を突返すと言うようなことは、現在とても出来ません。本当に原先生はその点、学問的に傑れておられたなあという気が致します。

それから次の理由は、原先生は私の中学校の先輩でもございました。前橋中学校でございまして、原先生のお生まれになりました玉村というところは、前橋のはずれでございまして、お前は中学の後輩だといつも言われておりましたし、私の兄がやはり前橋中学で原先生の二年後輩でございましたので、京浜同窓会と言うのがありまして原先生が会長で私の兄が副会長なんて言うことで、同窓会があってよくお目にかかりました。これが第二番目の理由でございます。

第三番目は、現在私、慶応を定年退職致しました後、津村順天堂の薬理研究所長と言うのを致しておりますが、

つまり漢方薬の研究を致しておるのであります。原先生は漢方の方のことに関しては非常に力をお尽くしになられました。矢数道明先生も、あるいは今日もお見えになっておられる大塚先生あるいは山田先生、その他有名な漢方の先生方は、大部分こちらの教室に何らかの関係をお持ちだということを私も存じております。東洋医学会と言うものが出来ました時から原先生は名誉会員でおられ、ずっとお尽くしになられておられました。その意味でも現に薬理研究所というものをやっております私にしますと、単に薬理と言うだけでなく漢方の方でも先輩である、中学でも先輩である、薬理の方でも先輩である、と言うようないろいろなことがございましたので、ちょっと場違いかと思いましたけれども敢えて罷り出たわけでございます。

まだ、考えて見ますといろいろあります。例えば私の嫁さんの候補者というのも原先生が紹介して下さったこともあります。これは話にはなりませんでしたけれども、そういう事もあります。それから私が慶応を止めます時の会合にも原先生が来られて、武見先生のあとで御挨拶も頂きました。それやこれやを思い出しますと、先生との間には随分いろいろなことがございました。

今日は一周忌にあたりまして、思い出の多いこの、長い先生の御一生を思って、非常に感慨深いものがございます。簡単ですがこれで私の御挨拶を終ります。

矢数道明先生

東洋医学と原三郎先生について思い出を語って欲しいという渋谷教授からお言葉がございました。ただ今、細谷英吉先生からも、私達と原先生のことについてお話を頂き恐縮致しました。私は、大正十五年に東京医専に入学致しましてその第一回の薬理学の講義の時でした。原先生は非常に歴史を重んじられまして、医学の歴史、薬の歴史、薬理学の歴史と言うようなことに造詣が深かったことは皆様御承知の通りと思いますが、その第一回の講義の時に原先生から中国明代の薬物学の大著と言われている李時珍の『本草綱目』について、詳しいお話をお聞きしまして入学早々非常に感激致しました。それ以来原先生からは、東洋医学について特別いろいろの教えを受けるようになりました。

昭和二十八年ですが戦地から帰りまして、薬理学教室に原先生をお尋ね致しました時に、先程もお話がありました、東洋医学会のことについていろいろお教えを受けました。日本東洋医学会は昭和二十五年に創立されました。この昭和二十五年発足当初はわずかに会員数が89名という微々たる会でありましたが、原先生にはその時名誉会員に御就任頂きまして、いろいろと、御指導を受けました。先生には名誉会員の次に、評議員に御就任頂きましたが、評議員会がありますと、先生は非常にお忙しい中をよくご出席下さいました。そして、私達にいろいろの助言、示唆をお与え下さいました。東洋医学会が出来たならば先ず東洋医学の用語集を作らなくてはいかん、これはどうしても学会でやりなさいとか、もう一つは日本に残された東洋医学の古書の総目録をつくりなさいとか、その他いろいろの示唆を与えてくれました。その後学会はその方向に向かって進展致しましたことは原先生のご助言によるところでございました。さらに原先生には丁度昭和四十年ですか、第十六回日本東洋医学会総会の会長に御就任頂きまして、東京医大の同窓会館で総会を主宰して下さいました。

次に私事になりますが、昭和二十八年に、戦地から戻りまして原先生をお訪ねしたとき、君の漢方歴も大分長くなったから、この際薬理学教室に入室して東洋医学と現代医学のかけ橋になるような、漢方薬を基材とした薬

理学的研究をしてみたらどうだろうかというお誘いを受けアコニチンの原植物、漢薬附子の研究に着手ご指導を頂きました。同時にまた大変有難いお言葉ですが、今後薬理学の時間に、学生に対して毎年一回でよいから、「東洋医学の梗概」について講義をして欲しいというご要望がございまして、その後も、渋谷教授からもお話がございまして、今年で三十三年間東洋医学のお話を申し上げております。医科大学の中で、正課の時間に、学生に対して東洋医学の講義を行ったのは、当時としては全くはじめてのことで、原先生のご英断であったと思います。そういう様に原先生と東洋医学にはまことに因縁が深いわけでございまして、原先生は当初から今後東洋医学が必ず再検討される時期が来るから、その時は方向を誤らないように、常に東洋医学の原点を忘れないようにということを常に教えられて参りました。原先生の予見されましたように、最近は御承知のように東洋医学が学界からも顧みられてきまして、国際的なものになりつつあります。昨年はアメリカ、中国、日本、香港、インドネシアの五ケ国で、東洋医学に関する国際学会が開催されました。今年十月には日本東洋医学会の主催によって、第四回東洋医学国際会議が京都で開催されることになっています。原先生は三十五年前から今日あることを展望されて、日本東洋医学会のためご協力、ご指導を下さったわけです。いままでは会員も三千名を越えるようになりましたが、会員一同心から原先生に感謝申上げて居る次第でございます。

原教授の思い出

元図書館長　三輪哲郎先生

先生と私はとても長いお付き合いである。断片的であるがその幾つかを紹介させて戴きます。先ず、先生と私の父が本学の大正九年卒の同期生であるという関係からか、私に対して学生時代（昭和十五・四〜十八・九）何に呉れとなく目をかけて下さった。当時としては先生は若く声が大きく威厳があり、教授室に呼ばれて色々御話を窺っても、気弱な私は何時も顔をあげてお聞きすることが苦手であった事が懐しく思い出されます。

この出会いは後々まで続くことになります。

卒後海軍短期現役軍医から復員した所謂終戦時の一時、私は東大久保のキャンパス病理学教室で研究（昭和二十一・一〜二十六・七）に没頭していた。時折先生から呼ばれ疎開先から戻ったバラバラの書籍の整理を手伝わされたことがあります。その作業を通じて先生の並々ならぬ図書に対する情熱をうかがい知る所となりましたが、その縁あってか、後に私は図書館長（昭和五十一・九〜）を務めることになり、又先生と図書館学会にお伴するようになりました。

時は過ぎ先生は満七十才の停年（昭和四十三・三）を迎へられました。その二年前、私が初代脳外科教授として就任（昭和四十一・一）し、教授会で恩師と席を並べることになり、とても面映い気持ちで接っしておりましたが、逆に先生から暖かい励ましの言葉と、教授としての心得を賜ったことが今も私の心中を去来しています。先生は停年后ガン研究事業団理事長（昭和四十五・五）になられたが、その秋、私は約三ケ月間（昭和四十五・九〜十一）諸外国の脳外科の教育事情と臨床面のあり方を探ねようと、視察旅行に出かけたことがあります。昭和四十五年十一・十二〜十三日ドイツ・ウルツブルグ大学脳外科を訪問した折、ふと学生時代の先生の講義の中でうかがったウルツブルグ大学留学時の話を思い出し、そのことを一枚の葉書きに託してお便りした所「よくぞ憶へていてくれた。私の青春時代をまざまざよみがへさせる貴重な便り」だと何かの随筆に書かれたことを後に伺い、先生のほのぼのとした一面をみることが出来ました。

晩年先生が不幸にして病を得られ、本院南病棟に入院していた折（昭和五十九年一月）のことであります。診療のあい間に先生を訪問すると、話し相手をみつけたとばかり、仲々離して戴けなかったが、その中で、「限り無くエレクトロニクスは発展しているが、老いた私はその埒外に立っているような気分だ」「やはり医療の原点は暖かい心と手のふれあいである」と強調されたことがありますが、今もって強烈な印象として私の脳裡に残っています。まだまだ紹介したいことはありますが、紙面の都合もあります。私の人生の色々のstage で年に応じて先生から薫陶をうけたことを心から感謝申しあげながら筆を擱かせて戴きます。

図書館副館長　菅　利信先生

原先生に最初にお会いしましたのは、昭和三十二年の春でございました。その年に本学に勤務することになりまして先生と或ることで話合いをしましたことがございました。その時以来、先生は私の言うことを大体聞いて下さるようになりました。特に良く聞いて下さいましたのは、昭和三十九年の秋、広島大学医学部で開催されました第三十五回日本医学図書館協会総会の時でございました。広島県は先生方がご承知の通り本学の同窓会の中でも非常に良くまとまっている県と当時原先生からお聞きしました。広島大学の総会に原先生がお見えになるということで本学の広島県の同窓会が原先生を歓迎することになっていたそうです。そのため原先生はおいしい酒を飲めることを期待していたことだと思います。私はそういうことを知りませんでしたので原先生に酒に酔っても私は知りませんと申しあげました。このことが聞いたようでその歓迎会の晩は少ししか飲まなかったようです。次の日に原先生の親しい他の大学の先生から、君は原先生に何か言ったのかと尋ねられましたが、私は原先生には何も申しあげておりませんと答えていました。しかし、原先生は私に言われたことが気になって余り酒は飲めなかったと言ったそうです。実は奥様から、地方にいったら家の主人（原先生）に酒を飲ませないでほしいと頼まれましたのでそう申しあげただけでありまして、奥様の言いつけとは言えるわけがありませんでした。

先程から理事長先生、学長先生のお話に図書館の話がありましたが、本学の図書館も昭和三十二年に建築されました当時は、医科大学の中でも目立つ存在でありましたが、他の医科大学が次から次へと新しい図書館を建築しましてからすべての面で見おとりがするようになりました。できますならば、私の定年になる迄に新しい図書館を建築していただきたいとお願い申しあげます。

日本医家芸術クラブ副委員長　菅　邦夫先生

私が原先生に親しくお目にかかれるようになりましたのは、私が医家芸術クラブの編集委員になりました昭和四十九年五月以来のことですから、先生にご昵懇頂きましたのはずっと先生の晩年というわけでございます。したがってご指導頂きました年月はいわば非常に短いのでございますけれども、その間非常に濃密な指導を頂きまして、一年が五年あるいは十年にも匹敵するくらいの感動を覚えるのでございます。原先生は先程来いろいろお話に出ましたけれども、剛直と風流とを兼ねるという、もうちょっとあり得ないような幅のひろい、奥行きの深い存在でありました。殊に日本的なものを非常に愛されまして、私も邦楽が好きなものですから、そういう意味で良く話が合いましたのでございます。邦楽と歌舞伎がお好きで、歌舞伎では亡くなられました守田勘弥丈、この方は非常に知性に勝れた俳優でいらしたという点で、特に先生のお気に召したらしいのですね。そういう関係で勘弥丈の奥様でいらっしゃいます藤間勘紫恵さんは、先年「紗窓」という歌集をお出しになりましたけれども、そもそも原先生が引張られて歌の指導をなさったと伺っております。ご存じの玉三郎さん、勘弥さんの子供さんですが、玉三郎さんのことを原先生はわが子わが孫のようなお気持で、もう玉三郎さんの話になると時間の経つのもてんで気にならなくなってしまって、まわりの者が場所柄どうかなとやきもきしてしまうほど夢中になって、口角泡を飛ばして大きな声で際限もなく喋られるのでした。あの若い、人気絶頂の玉三郎さんが地味に着実に勉強をしておられることが、原先生の琴線に触れるものがあったのだろうと深く考えるのでございます。

先生は京都が物凄くお好きで「君、祇園の芸者がね、もちろん年はとっているのだけれども……………」というような話になると本当に楽しそうで、こちらはそんなことといってる暇があったら一度お供させてくださればいいのにと、いつか祇園へお供する日を楽しみにしていたのですけれども、とうとう叶わぬことになりました。こういうわけで、先生は京都に凄く詳しいので、ずっと京都在住の守屋正先生、これまた医家芸術のほうの錚々たる方ですけれども、この方が原先生の前にでると、京都のことは原先生に聞いてくれといわれるほどなんですね。

ご自分はずっと京都で育って、京都に根が生えているのだけれども、その守屋先生がそんなふうにおっしゃるほど原先生は京都のすみずみにお詳しいのでした。
まあとにかく、医家芸術というのは晩年先生が非常に心根を打ち込まれた仕事で、会う人ごとに強く勧誘なさって、恐らくこの中にも被害者ーーというとちょっとあれなんですけれども、随分いらっしゃるのではないでしょうか。もう顔さえ見れば「君、入れよ」で、事実たいていの方は入ってしまうんですね。私なんか人に勧めても「うん、そのうちに……」なんていうだけですけれども、原先生にかかっては「君、入れよ」といったらすぐ入ってしまう、もう魔力ですね。そういうふうな案配でございました。こちらにご婦人のご出席者も大ぜいいらっしゃるので、恐らく原先生にしてみればご婦人方の挨拶の一つ二つもあっていいのにと思っていらっしゃるのではないかと思うのですが、さっきの藤間勘紫恵さんとか、あと例えば、三宅千代さん、「夕映の雲」という長編小説を物された、これはお弟子さんの奥様なんですね。それから熊谷美津子さんだとか、発言して頂きたい方が一杯あるのですけれども、お名前だけをちょっと。
そういえば、川原利也さんーー昨年亡くなった門下生の方ですけれども、先生はやはりここで、「川原君、君、有難うよ」とおっしゃっているのではないかと思うのです。川原さんは非常によく、いわゆる下働きをなさっていらっしゃいました。まあこの辺で終わりたいのですけれども、このままで終ると先生に叱られそうな気がする……「君、日本医家芸術クラブの宣伝はどうなったんだい」と、そういわれそうな気がいたしますので、その点をちょっと申し添えて、皆様のご支援をお願い致したいと思うのでございます。

旧白日社詩歌同人・現青天短歌会顧問　嬶崎稲男先生

私嬶崎稲男と申します。原先生とは昭和七年以来の文学上のお付合いであり、そこにいらっしゃる伊能先生あるいは去年亡くなった川原利也先生と共に、前田夕暮直門を誇り、そして原先生に直接指導を受ける、そういうような立場で現在まで来ておるものでございます。いわば、原先生直門、三羽烏の一人であると思います。一番烏は伊能先生であり、二番烏は去年亡くなった川原利也先生、茅ケ崎の眼科病院長であります。三番目が私でありまして、私は文学上の弟子であります。しかし、原先生と付合って以来、人生に対するいろいろな指導をも受けてきた訳であります。

原先生は沢山作品を残されていますが、その中から数首を私なりに選びまして、朗読、朗誦、更には朗詠を致したいと思います。

初期の作品より、

水上の浅間の煙ひろがりてわれらのまうへに来たりけるかも

月のぼり河原白けくなるころはくちづけもせで別れたりけり

ひるの日の温みほのかに残りいるこの砂丘にしぬび会ひたり

中期になって、原先生のノイエザハリッヒ、新即物主義の歌から、

メチルオレンジの溶液を作っていると何と晴々しいけさの実験室

どんより曇っている午後の実験室窓際に立っている青白い顔（K君）

長い放恣の生活から急に鉄砲をかついでゆけるかと思ったりする

不気味な感情が体を流れるファッショの国と手を握るという

中期あるいは晩年の作から、

気象警報出でたる夜なり難解の条件反射の章読み続く

名誉教授寂しき名かな黙然と自室に籠もり慎しめという名か
実験に殺せし猿の幾匹の顔まざまざと今も浮かびく
生くる日も命死したる後の日も楽しかるべし鐘のひびけば
わが骨をふるさとの寺に埋めんと心に決めて明かるかりけり
我八十六汝八十二残る日は自ら知れど心は強し
最後にお手許の印刷物にもありますが茉莉花の歌
茉莉花の白花庭に薫るなり古稀の誕生日迎えし朝に
さて甚だ僭越ですが、私どうしても原先生に今ここで捧げなければならない歌を作りましたので、これを読ませて頂きます。長歌及び短歌になります。
医学、医術、そして文学、芸術、とりわけて短歌芸術にと諸々の道極めける
原三郎先生の勲高し高し君をここに仰がん
短歌
原先生医学と文学を極めけり道のしるべの光となりて

親族代表　原　武　一　郎　様

親族を代表致しまして一言御礼の挨拶をさせていただきます。本日は、この様に盛大な、しのぶ会を催していただきまして誠に有難うございました。私故人の遺言により、今後墓地を守ることになりました。実家で農業を営んでおります甥に当たります。原武一郎と申します。

私、今朝出発する前に墓地へ参りまして、今日の催しの報告を致して参りました。叔父夫妻の墓は菩堤寺でありますす伊勢崎市真光寺の鐘楼のすぐ近くにあります。期せずして、故人の寄贈致しました鐘の音を聞きながら隣に竹藪のある静かな枯れ葉が散る墓地で二人で仲良く眠っております。

思い起せば、一年前の今日で御座居ます。不幸の報告をいただき、早速参上致しましたが、車中種々と今後を心配しておりましたが、伊能先生初め渋谷先生の奥様、児玉先生、又多くの先生方のお陰で安置室で心安らかに眠っておられました。先生方には、十二時過ぎまでお守りしていただき、親族以上の御厚情に頭の下がる思いで御座居ました。

皆様お帰りになられた後一人で叔父の霊前にいたわけですが、叔父は私に語りかけて下さいました。「俺は幸せだった」と……東京医大と共に歩み生涯をこの病院で終わる事が出来、弟子の方々のお守りをいただき故人の最良の幸せだったろうと思われました。その後、叔母茂子も生死の境を何度となくくり返し、生命のある限り先生方、看護婦さん達の懸命な看護をいただき、一緒に生涯を終わった事は二人共さぞ満足だったろうと思うのです。

その後の行事等も皆、学校の方にお世話になり感謝の言葉もありません。唯今は諸先生の思い出話やエピソードをお聞き致しまして、私共の知らなかった二人の一面を知る事が出来ました。私も昔の叔父の懐しさを思い浮べております。故人を連れて郷土のお寺、川、名所、思い出の地を車で何度か廻った事や、良く小言を言われた事など……でもいい叔父であり叔母でありました。今日お招きいただき、学長様始め多数の先生方の参列をい

ただき、故人の思いを語っていただいた事は、早速明日霊前に行き報告致します。

本当に本日は、有難うございました。有難うございました。この一言につきます。願わくは、皆さまの思い出の中に故人原三郎、茂子の事を片隅でもいい、末長く残していただければ有難いと存じます。最后に皆さま方の御活躍とお健康をお祈り致しまして、まとまりのないお礼の言葉と致します。

東京西北ロータリークラブ元会長　渡辺茂夫先生

只今御紹介に預かりました渡辺でございます。只今までは学者としてあるいは教育者として、あるいは芸術家として、原先生の偉大なる面を皆様からこまごまと発表がありまして、いずれも同感であり、深い敬意を表しております。

私が申し上げたいことは、ちょうどここにいます約十名の人々は東京西北ロータリークラブの方で、先生と約二十年以上のつきあいの方だけが今日ここに御招待されたわけでございます。私も先生と二十二年に渡るロータリアンとしての交友でございます。私がここで申し上げることはロータリーの精神の中に、まあここにもたくさんロータリアンがいらっしゃいますから、いうまでもないことでございますが、ロータリーのその精神の中にとにかく出席をすること、出席をしてそしてロータリーの使命に努力して欠席をしないという精神の中に非常に立派なものがあると私はいつも思っております。ところが先生は二十四年間無欠席でございます。これはですね、今までのような沢山のお話がありましたが、このことですらなかなか出来ないことでございます。原先生があれだけの立派な仕事をやり、あれほどの大きな仕事をやっておられながら、ロータリーに対しましては非常な熱意をもって二十四年間欠席しないで出て頂きました。これは先生の立派な人格の一端を物語るものでございます。私が先生とちょうど二十二年前でございますが、私も西北ロータリーに入りました時に、それまで原先生を私は直接には知りませんでした。ところが最初おめにかかったとき、こういう話しでございました「君、ロータリーに入ったね。僕は君の先生を非常に良く知っておる」と。と申しますのは、私の直接の先生は日本の、先程脳外科の三輪教授がお話になりましたが、その脳神経外科のパイオニアでございました。その人は日本の脳神経外科の基を作った斎藤眞教授でございます。ちょうど原先生と八つほど年が違うと思いますが、もし斎藤教授が生きておられますと、九十六、七でございますが、原先生も八十九才になられると思います。その時にですね、最初先生が斎藤先生にあった時に斎藤先生がどうおっしゃったかというと「君の仕事も大変だな」と、そうしたら原

先生は「いやもうあの当時斎藤先生は人の脳を沢山手術しては殺してばかりであった。しかし大変な厳しい道であった」と。ところが御承知のように原先生は神経薬理学をやっておられました。その頃のNEUROPHARMACOLOGYは日本にはほとんどなかったのでございます。先生はそのパイオニアでございます。そういう意味において二人のパイオニアがそこで胸襟を開き意気相投じたというのではないかと思います。

その他、いろいろ沢山話はございましたが、時間がありませんのでいちいち申し上げませんが、そういう学者として、ロータリアンとしての一つ一つの立派なお仕事、並びに先程私は先生の一生のスライドを拝見しました。あの輝ける一生の姿を見ておりますと、ちょうど先生の学生の時の、いわゆる有名な東京医科大学を創られた時の建学精神というものが、未だ多く語られていないのではないかと思います。私の聞いたところによりますと、いつもそう思いますが、明治人のパイオニア精神とロマンというものが、もし医師という者を通じてあるならば、結局、原先生が同僚と共に東京医科大学を創られたあの精神、その精神のもとに先程渋谷教授がおっしゃいました伝統と歴史が生まれたのだと思います。そういうものを作ったということ、それが即学問にも通じ、先生の芸術にも通じ、また我々ロータリアンとしての精神に通じるのではないかと思います。そういう点で私は非常に明治人の気迫、つまりそのパイオニア精神とロマンというものが先生の全人格を通じて出ているのだと、痛切にそういうことを感じました。私はここに西北ロータリーの十人余の方と共に出席させていただきまして、正しくそのとうりであったと深い感動にふるえながら同時に私の感激を述べまして、先生を偲ぶ言葉に致します。終わります。

吾妻勝子様

御紹介頂きました吾妻勝子でございます。吾妻徳穂先生の所で踊りをさせて頂いておりますが、本来なら今お話に出ました勧棠栄先生の方が、踊の方でも大先輩でございますし、歌の方で原先生のお弟子さんでいらっしゃるので、御挨拶なさる方だと存じますが、今日いらっしゃらないので私がさせて頂きます。

ただ私は、私の母が奥様の御実家の渋川の大竹家の御一家と六十年位のお付合いでございました、私が生まれる前から。そういうわけで、生まれた時から可愛がって頂いておりまして、母の道楽で踊りを始めまして、今は亡くなりましたが弟と、そうですね、私が五才、弟が三才位の時から、もちろん東京都内で踊ります時は必ずいらして下さいますし、今度は渋川の大竹様のお家でお催しがありますと必ず呼んで頂きまして、連れていって頂いて、踊らせて頂いておりました。そういう時には原先生が御一緒の時もございましたし、必ず奥様御一緒で、私にとりましては、とっても、必ず可愛がって頂ける、御褒美を頂ける、大好きな小父様と伯母様でございました。伯母様は今もお話に出ましたように、大変に優しいのでございますが、厳しいところもございまして、いつも後でお電話を頂くと、「あそこは良く、とっても良く、ここはちょっとね。」という厳しい御批評を頂きました。なんとなく舞踊家となりましたけれども、とっても喜んで下さいました。退官後は先生も御一緒に良くいらして下さいましたのですけれども、下北沢のお宅へは母もしょっちゅう伺っておりましたし、私もお使いによく上がらせて頂いておりました。そういう時は実を申しまして、奥様とのお付合いの方が濃うございましたので、先生は今伺いましたような偉い先生とは存じませんで、どちらかといえば、伯母様の方がお強くて、先生は優しい小父様という感じが致しておりました。

ちょうど亡くなられる、一月位にならなかったかと思いますが、ベッドで並んでお休みになっていらっしゃる時にお見舞いに上がらせて頂きました。ちょうど奥様は歩行訓練でお留守でいらっしゃいました。それで先生とお話しておりました。工事中でとてもうるさかったのですけれども「今はうるさいけれども、もう来年になった

顔が忘れられません。それから、ほんの暫くでございました。後で伺いましたら、御機嫌の悪い時にはなかなか病室に入れて頂けないのだそうですけれども、最後までとっても喜んでお目に掛れて、有難かったと存じます。

それで私事でございますけれども、私も結婚して大分になりますけれども、子供がおりませんのでございますけれども、私の母などは、そのことを非常に気にしまして、あんなにも幸せな御夫婦は無いけれども、後をどうなさるんだろう、と人事ながら、よそながら、御案じ申し上げておりましたのですけれども、こうして渋谷教授初め皆様が、御法事から何からなさっていると伺いまして、今もちょっと病院に入っておりますが、まあ、本当にやはり最後まで本当にお幸せで、御夫婦円満で、お幸せの典型のような方なのね、と今日も話して出て参りましたが、私もたまたま子供がおりませんのですけれども、踊りを通しまして何人か子供を教えておりまして、将来先生方のようには参りませんが、親子のような子弟になりたいなと、そういう意味でもあやからせて頂きたいと思いました。

本日はお招き頂き有難うございました。

（文責　渋谷）

閉会の言葉

三緑会幹事　菊田能敬先生

本日は私共恩師の原三郎先生の一周忌にあたりまして、先生御夫妻を偲ぶ会と致しまして開きましたところ、御多忙中にもかかわりませず多数の先生方にお出で頂きましてしかも数々の懐かしい、また先生のいろいろなエピソードその他を承ることが出来まして、本当に有難うございました。さぞかし、先生御夫妻は今写真にありましたように天国で喜んでおられることと思います。中でも我大学の理事長が、先生が非常に心配しておられた、大学の図書館を立派にするということを断言して頂きまして、私共弟子共として大変嬉しく存じます。現在、先生の後を継いで渋谷教授以下若い者たちは懸命に勉強しております。先生の遺志を継いで必ずや立派な業績を上げてくれるものと思っております。本日御参会の皆様方、どうぞ御心配なく、先生の遺志を継いでこうして弟子共が立派にやってくれることを希いまして、本日の御礼の言葉にかえさせて頂きます。本当に有難うございました。

三緑会会員名簿

昭和六十年十一月現在

氏名	入室年	退室年	卒業年度	郵便番号	現住所	摘要
※原 三郎	大一三	昭五九	大九	372	逝去 昭和五十九年六月十九日 菩提寺 群馬県伊勢崎市今井町四八八番地 真光禅寺 〇二七〇―二四―〇〇六九	
※木内盛夫	大一三	昭四	大九		逝去 昭和五年四月	
顧問 岩尾泰次郎	昭四	昭一一	大一二	153	目黒区五本木一ノ三一ノ一五 七一三―七八一二	開業 七一二―〇六二六
※土屋政司	昭一六	昭二二	大九	280	逝去 昭和三十九年一月 遺族 千葉市泉町北谷津六八	
上原太郎	昭一〇	昭一六	昭七	802	北九州市小倉南区北方一ノ一二ノ三二 〇九三―九二一―一二〇二	開業（内科）
※岡本不二雄	昭一二	昭一四	昭一四	862	遺族 熊本市出水町国府二一〇四	
※森 一郎	大一四	昭一九	大一五	236	逝去 昭和五十七年十二月 遺族 横浜市金沢区寺前町四七	
伊能秀記	昭一四	在室	昭一四	130	墨田区両国三ノ一七ノ一 六三一―〇七七五	東京医科大学常務理事・開業 墨田区亀沢町二ノ一五ノ八 六二四―三三六六
※佐多正大	昭二三	昭二五	昭四	144	逝去 昭和三十七年五月 遺族 大田区雪ヶ谷三六九	
※今井治郎	昭一四	昭二四		166	逝去 昭和五十五年七月三日 遺族 杉並区成田西二ノ一〇ノ三六	
益川庄平	昭六	昭二五	昭九	221	横浜市神奈川区白幡仲町一 〇四五―四〇一―九三三七	開業（内科・小児科）
塚田 正	昭二二	昭二六	昭九	310	水戸市堀町二二七四ノ四〇 〇二九二―五一―九七八四	開業
竹村亥代三	昭九	昭一四	昭九 東薬	330	大宮市東町一ノ二八 〇四八六―四一―〇五七九	

※印は物故者

氏名	入室年	退室年	卒業年度	郵便番号	現住所	摘要
※黒田朝太郎	昭二三	昭二七	昭 城大		逝去	
河守和彦	昭二三	昭三三	昭二二 日大	154	世田谷区松原五ノ六〇ノ六クレドール東松原三〇一 三二七－二五二五	新聞梱包運輸㈱社長
※坂崎善雄	昭二九	昭二九	大一四	869-05	遺族 熊本県下益城郡松橋町大道	
赤座斎	昭二三	昭二五	昭一三	504	岐阜県各務原市那加門前町三ノ八九 〇五八三－八三－一〇四五	赤座病院院長 〇五八三－八三－〇一三八
佐藤淳	昭二四	昭二八	昭一六 新大	166	杉並区阿佐ヶ谷北四ノ二五ノ二 三三七－六一八九	
阿川悌二郎	昭八	昭三〇	昭一一	191	日野市川辺堀ノ内五六五 〇四二五－八五－〇〇五一	開業（眼科） 〇四二五－二二－四四四一
佐藤俊樹	昭一六	昭三一	昭一九	350	川越市六軒町二ノ一四ノ二 〇四九二－二二－一一七八	開業（産婦人科・皮ふ科）
大柴吉文	昭二五	在室	昭一六	160	新宿区新宿五ノ二ノ六 三五四－〇九三八	開業・薬理学非常勤講師 三五一－五七〇〇
片根勝雄	昭二六	昭三一	大一三	124	葛飾区立石八ノ三ノ四 六九一－〇〇五六	開業（内科）
秋元藤之助	昭九	昭一三	昭一二	979-43	福島県田村郡船引町大字船引畑添四 〇二四七八－二－〇〇六七	秋元病院院長 〇二四七八－二－一五一四
※大野俊一	昭二六	昭三〇	昭一六	165	遺族 中野区新井一ノ一七ノ一一	
片根義純	昭二五	昭三一	昭二四	124	葛飾区東四ツ木四ノ三五ノ一八 六九七－一七八三	開業（内科）
原担久	昭二七	昭三二	昭二三	164	中野区本町三ノ一九ノ一一 三七二－四八九七	開業（耳鼻科）

氏名	入室年	退室年	卒業年度	郵便番号	現住所	摘要
野原峰松	昭四六	昭三二	昭二五	116	荒川区東尾久四ノ四六ノ一六 八九三－八三六三	開業（内科）
水上明彦	昭二六	昭三二	昭一六 長大薬	214	川崎市多摩区西生田四ノ二四ノ九 〇四四－九六六－四五三七	北里大薬学部講師
渡辺忠	昭一一	昭一九	昭一一	165	中野区松ヶ丘一ノ一九ノ二十一 三八九－二六一六	渡辺病院院長
※関隆	昭二九	昭三四	昭二四 千葉大	164	逝去 昭和五十五年八月 遺族 中野区中央二ノ二ノ三四	
真泉平治	昭三二	昭三四	昭一五 日歯大	167	杉並区堀之内三ノ二三ノ一〇 三一二－一六五二	日本歯大教授（薬理）
※鳴海寛	昭一五	昭三二	昭五	244	逝去 昭和五十六年二月 遺族 横浜市戸塚区上杉尾町三五〇ノ三 満谷方	
菊田能敬	昭二一	在室	昭二六	165	中野区野方一ノ四一ノ五 三八八－六六〇一	中野病院院長 三八九－二二〇一
※桑田敬二郎	昭二九	昭三三	昭一〇	155	遺族 世田谷区北沢二ノ一二ノ一二	
松田精賢	昭二九	昭三三	昭一八 東安医	168	杉並区高井戸西二ノ七ノ三 三三二－七八〇八	開業（内科・小児科）
永田良平	昭一一	昭三三	昭四	358	埼玉県入間市新久五九四ノ一 〇四二九－三六－一七一七	永田病院院長 〇四二九－三六－一八七五
※山田益城	昭三〇	昭五〇	東薬	177	逝去 昭和五十四年十二月 遺族 練馬区下石神井一ノ三七三ノ六	
※斎藤福治	昭一〇	昭三四	昭一〇	370-11	逝去 昭和五十二年四月 遺族 群馬県佐波郡玉村町下新田五一八	
矢数四郎	昭二九	在室	昭五	162	新宿区新小川町三ノ四 二六〇－一二七五・一四七三	北里研東洋医学総合研所長・開業・薬理学非常勤講師

氏名	入室年	退室年	卒業年度	郵便番号	現住所	摘要
柳浦才三	昭三〇	昭三五	昭二九	157	世田谷区粕谷四ノ一二ノ六 三〇九―六三二一～二	星薬大客員教授・こうさい会病院 七一三―五三三〇
今井誠伍	昭三〇	昭三四	昭二九	372	群馬県伊勢崎市中央町一九ノ二二 〇二七〇―二五―〇七〇一	開業
※森玄俊	昭三〇	昭三五	昭一六	321-03	逝去 昭和五十八年七月一日 遺族 宇都宮市飯田町四一九	
柳谷敬二	昭三〇	昭三四	昭二九	410	静岡県沼津市沼北町一ノ七ノ一五 〇五五九―二一―八二七四	緑町病院 〇五五九―六二―〇九三二
高木弘	昭三一	昭三五	昭二三 東薬	158	世田谷区等々力七ノ三ノ二四 七〇二―六五四八	三共㈱安全性研究所所長
木村健	昭三〇	昭三五	昭二九	171	豊島区千早町二ノ二五 九五七―八六一一	開業・星薬大講師
渋谷健	昭三一	在室	昭三〇	141	品川区上大崎二ノ四ノ一九 四四四―一〇一八	東京医科大学学務長・教授
碓井浩	昭三一	昭三五	昭三〇	115	北区志茂二ノ六四ノ七 九〇二―六五七五	開業 九〇二―六二〇一
堀内国雄	昭三一	昭三五	昭三〇	400	甲府市湯村一ノ一〇ノ二八 〇五五二―五二―六九六〇	堀内整形外科医院院長 〇五五二―五二―九五〇一
佐藤直達	昭一六	昭三五	昭一八	115	北区志茂一ノ一二ノ一八 九〇一―一〇八九	開業（内科・小児科）
斎藤広基	昭三一	昭三五	昭二六 日大医	104	中央区八丁堀三ノ一九ノ六 五五一―七五一一～二	中央病院院長
金子博道	昭二三	昭三五	昭二七	171	豊島区長崎二ノ一六ノ一五 九七三―三八一一	敬愛病院院長
坂本浩二	昭三〇	昭五〇	昭二八	160	新宿区大京町一八 三五一―一六一二・〇五四三	昭和大医第一薬理教授 七八四―八一二四

氏名	入室年	退室年	卒業年度	郵便番号	現住所	摘要
片根規雄	昭二七	昭三六	昭二七	123	葛飾区立石八ノ三九ノ一一 六九七－〇三一一	開業
清水富久雄	昭三二	昭三六	昭二六	114	北区上十条五ノ二七ノ一一 九〇八－二〇〇五	開業
※津端宏	昭二八	昭三六	昭二四	103	逝去 昭和六十年三月一九日	
稲津佳彦	昭三一	昭三六	昭一六 東薬	185	府中市晴見町三ノ三〇ノ一一 〇四二三－六二－五三一〇	
城克彦	昭二〇	昭三六	昭二三	632	奈良県天理市三島三七九 〇七四三六－三－一九五七	開業
※新倉操	昭二三	昭三六	昭二七	194-01	逝去 昭和五十五年五月 遺族 町田市大蔵町一〇九五	
星川英夫	昭三三	昭三八	昭三二	222	横浜市港北区新吉田町一一四九ノ二 〇四五－五三一－三三八七	開業
松岡明哲	昭三三	昭三九	昭三三	332	埼玉県川口市芝新町四ノ七 〇四八二－六一－三三八八	開業 〇四八二－六五－三三一二
増田栄司	昭三四	昭三九	昭三三	114	北区東十条二ノ五ノ一 九一一－〇六六五	開業
高橋良士	昭三六	昭三九	昭三四	997	山形県鶴岡市長者町九ノ五 〇二三五－二四－一七五三	宮原病院院長 〇二三五－二三－三三一一
中村幸雄	昭三四	昭四〇	昭三三	180	武蔵野市御殿山二ノ二〇ノ七 〇四二二－四五－四三二七	開業 〇四二二－四七－三八八一
矢数圭堂	昭三五	昭四三	昭三二	162	新宿区新小川町三ノ四 二六〇－一二二五	開業・昭和大第一薬理非常勤講師
※小林立徳	昭三六	昭四二	昭三五	106	逝去 昭和五十二年六月 遺族 港区東麻布三ノ一ノ一	

氏名	入室年	退室年	卒業年度	郵便番号	現住所	摘要
堀部真広	昭三八	在室	昭三七	101	千代田区猿楽町二ノ八ノ五 二九一－八一三五	東京医科大学助教授
時崎謙	昭三二	昭四二	昭三〇	182	調布市国領町五ノ三一ノ一 〇四二四－八三－二九二四	多摩川総合病院院長 〇四二四－八三－四一一四
佐藤里子	昭三八	昭四二	昭二六 東邦大	389-21	長野県下水内郡豊田村上今井六〇一 〇二六九－三八－三三一一	佐藤病院院長
菊田健一	昭三九	昭四二	昭一八	228	神奈川県座間市さがみ野三ノ一ノ一二 〇四六二－五三－一三三四	開業
小沢光	昭四二	昭四三	昭三二	980	仙台市八幡六ノ六ノ八 〇二二二－三四－三〇四七	日本薬理学会名誉会員 東北大名誉教授
平山八彦	昭四〇	昭四三	昭三〇 日大農	187	小平市花小金井六ノ一〇二ノ九 〇四二四－六一－二三〇八	富士レビオ㈱第四研究部部長 〇四二六－四五－四一七七
笠原多嘉子	昭三五	昭五〇	昭三五 明薬	177	練馬区関町北三ノ一六ノ一四 九二九－四四九五	昭和大医第一薬理講師
板橋博史	昭四〇	昭四四	昭三八 日医大	165	中野区大和町一ノ二七ノ三 三三七－三六二八	中野病院 三八九－二二〇一～四
佐々木康雄	昭四〇	昭五〇	昭三九	143	大田区大森北六ノ二五ノ二三 七六五－〇三〇三	開業（産科・婦人科）
松田宏三	昭四二	在室	昭四一 日獣	168	杉並区和泉三ノ二七ノ九 三二四－二七四一	東京医大薬理学講師
小島文夫	昭四三	昭五〇	昭二六 昭和大	241	横浜市旭区鶴ヶ峰本町一一三九 〇四五－九五二－一一〇一	開業 〇四五－九五一－二三五四
安部邦夫	昭四三	昭五〇	昭三四	359	所沢市三ヶ島三ノ一一四〇ノ五 〇四二九－四九－一八八八	開業
松宮輝彦	昭四三	昭五〇	昭四三	167	杉並区荻窪三ノ四一ノ二五 三九八－〇八五七	東海大医薬理学助教授 〇四六三－九三－一一三一

氏名	入室年	退室年	卒業年度	郵便番号	現住所	摘要
中田和一郎	昭四三	昭四四	昭四一	390	松本市沢村二ノ一二ノ三四 〇二六三－三五－六四一一	城西病院（内科） 〇二六三－三三－六四〇〇
反町正之	昭四四	昭五一	昭四三	001	札幌市北区新琴以五条一六ノ五ノ二〇 〇一一－七六四－五一八七	小樽市錦町一九ノ二 〇一三四－二三－一七〇八 畑内科小児科医院
中川路勝夫	昭四四	昭五一	昭四三 日医大	114	北区西ヶ原一ノ二四ノ一四 九一五－〇二一一	開業
遠藤任彦	昭四五	昭五八	昭四五	272	千葉県市川市大野町一ノ四六七ノ五 〇四七三－三七－六四二三	東京医大法医学助教授
藤田允信	昭四五	在室	昭四四 北大薬	070	旭川市六条三丁目右六号 〇一六六－二三－六八九〇	
日野恵司	昭四六	在室	昭二六 名市大薬	338	埼玉県与野市大戸六五二ノ二ノ四〇一 〇四八八－三二－四二〇四	東京医大薬理学助手
伊藤千尋	昭四六	昭五六	昭四三 東薬大	270-11	我孫子市青山台四ノ六ノ二一 〇四七一－八二－〇四八七	持田製薬富士中央研究所ディレクター 〇五五－〇八－七八八一
陳博忠	昭四七	昭五七	昭四四 中山医		台湾・台北市北投区泉源路三〇号七F－C 〇二－八九四－五四八九	私立中山医学院・台中市台中港路一段二三三号〇四三－二一九五一一 省立基隆医院内科・基隆市信二路二六八号〇三二－二六八一三一
林正朗	昭四七	在室	昭四七 明薬	160	新宿区新宿六ノ一五ノ六東京医大住宅三ノ一 三五四－六五一三	東京医大薬理学助手
佐藤勝彦	昭四八	在室	昭三〇 星薬	166	杉並区高円寺北三ノ三二ノ五 三三七－五五八三	東京医大薬理学助教授
西森司雄	昭四八	昭五五	昭四五 東北薬	529-17	滋賀県甲賀郡水口町貴生川四〇六 〇七四八六－二－六八九八	環境保健生物研究センター副所長 〇七四八六－二－二三一六
一之瀬幸男	昭四八	在室	東北農大	151	渋谷区上原三ノ二六ノ五 四六五－六七二八	聴講生（国立栄養研究所 二〇三－五七二五）
藤原忠	昭四九	在室	昭三六 富山大薬	229	相模原市古渕一五〇七ノ七 〇四二七－五七－三五五一	千代田区永田町二ノ四ノ二 日本サノフィ㈱秀和治池ビル3F 〇三－五八一－五七四一

氏名	入室年	退室年	卒業年度	郵便番号	現住所	摘要
浮田かほる（旧姓野村）	昭四九	昭五三	昭五〇 北里大	180	武蔵野市境一ノ一七ノ六興栄マンション六一二 ○四二二—五四—九五三五	
高橋則行	昭五〇	在室	昭二三 東薬	165	中野区野方二ノ六〇ノ一〇 三八六—一二五〇	東京医大病院薬剤部長 薬理学非常勤講師
道永啓以智	昭五〇	在室	昭一六 満大	130	墨田区江東橋二ノ一二ノ三 六三一—〇九〇三	専攻生・開業（内科・小児科）
石井誠	昭五〇	在室	昭四一 麻布獣	192-02	稲城市東長沼四一二ノ五 ○四二三—七八—〇二八六	東菱薬品(株)青梅研究所 ○四二八—三一—二二九三
井上和彦	昭五〇	昭六〇	昭四六 金沢大医	111	台東区浅草四ノ四一ノ六 八七四—九五二五	東京女医大整外助教授 三四八—〇九八八
浮田恒夫	昭五一	昭五五	昭五一	180	武蔵野市境一ノ一七ノ六興栄マンション六一二 ○四二二—五四—九五三五	武蔵野日赤病院内科 ○四二二—三二—三一一一
冨士田豊	昭五一	昭五五	昭五一	193	八王子市めじろ台一ノ二ノ一 京王めじろ台マンションC—三一 ○四二六—六三—四五六〇	
柯文昌	昭五一	昭五五	昭四〇 台北医		台湾・台北市荘敬路三九五号 ○二—七〇二五四五五	台北医学院教授（薬理学） 台北市呉興街二五〇号 ○二—七〇〇一六六一
高須矯	昭五二	昭五六	昭四八	259-12	神奈川県平塚市岡崎六四〇〇ノ一 ○四六三—五八—七六六七	開業（内科）
菊田正彦	昭五二	昭五七	昭五二	228	神奈川県海老名市さつき町一ノ八ノ五〇二 ○四六二—三一—三五九三	仁愛会海老名総合病院内科 ○四六二—三三ノ一三一一
相沢潔	昭五二	昭五七	昭五二	167	杉並区南荻窪二ノ二三ノ一八 三三五—三九三〇	東京医大病院麻酔科助手
松永寛幸	昭五二	在室	昭五〇	430	静岡県浜松市住吉二丁目七・カトレア五〇一 ○五三四—七三—四一五八	専攻生・川口会病院 ○五三七—二—四一七八
林秀憲	昭五二	在室	昭四九	410	静岡県沼津市御幸町一〇ノ一一・三幸ビル2F ○五五九—三二—八二六九	専攻生・開業 ○五五九—三一—一一二〇

氏名	入室年	退室年	卒業年度	郵便番号	現住所	摘要
斎藤典之	昭五二	在室	昭五〇 東大薬	191	日野市多摩平五ノ一五ノ六帝人豊田アパート十四号 〇四二五－八五－一五四五	専攻生・帝人生物医学研究所 〇四二五－八一－四三二一
橋本達也	昭五二	在室	昭三〇 熊本医大	188	保谷市住吉町四ノ一ノ三 〇四二四－二一－二九三三	専攻生・荻窪病院泌尿器科
謝明村	昭五三	昭五五	昭三八 中国医		台湾・台中市健行路四〇一号 〇四二－三一三九〇六	中国医薬学院教授・同中国薬学研究所所長 台中市英才路二号 〇四二－三五四七五五
山田博一	昭五三	昭五九	昭五三	166	杉並区阿佐ヶ谷南二ノ一一ノ二五 三一六－三五一八	東京医大病院内科
石田啓一郎	昭五三	昭五八	昭五三	951	新潟市西大畑町六二〇ハイツ日本海五〇二 〇二五二－二四－六〇〇六	新潟大学医・内科第二 〇二五二－二三－六一六一
松尾喜美子	昭五三	昭六〇	昭四四 熊本医大	165	中野区若宮二ノ三七ノ一六 三三六－四一四六	川柴病院小児科 六五三－五五四一
平重徳	昭五四	昭五八	昭四五 北大	153	目黒区東山二ノ二二 官舎七二二 七一九－九五二八	陸上自衛隊衛生補給処 四二九－五二四一 内二七八
原一恵（旧姓中川）	昭五四	在室	昭五四 千葉大薬	177	練馬区石神井台四ノ四ノ一〇 東京医大住宅A－二〇一 九二九－五六一〇	東京医大薬理学技手・秘書
中野正夫	昭五四	昭五八	昭五〇 金沢大薬	930-03	富山県中新川郡上市町広野九七五 〇七六四七－二－〇九三一	富士化学工業㈱
青木誠	昭五四	在室	昭五四 日大松歯	150	渋谷区広尾四ノ一ノ七ノ一〇〇三 四八六－四七一六	専攻生・富久歯科 三五三－六四七八
黒田喜代志	昭五四	在室	昭四〇 麻布獣	410-21	静岡県田方郡韮山町三五三ノ一二 〇五五九四－三九〇五	専攻生・東洋醸造㈱ 四五四－七五一一
高橋智子（旧姓佐藤）	昭五五	在室	昭五五 金医大	112	文京区白山四ノ三三ノ一二 ライオンズマンション一二〇四号 八一六－六六四〇	専攻生
張光雄	昭五五	在室	昭五五 中国医薬学院修士		（帰省先）台湾省台中市復興路二段一二〇号 〇四二－六二五五七〇・六一八二二〇	研究生

氏名	入室年	退室年	卒業年度	郵便番号	現住所	摘要
奥村研史	昭五五	在室	昭四三	251	藤沢市大庭五五〇七ノ二 〇四六六－八七－一三〇〇	専攻生・奥村医院
劉鴻栄	昭五六	昭五九	昭四四 台北医学院		台北県永和市中和路四九三号 〇二－九二四七二六二	私立台北医学院生理系教授 台北市呉興街二五〇号 〇二－七〇〇一六六二
高木世香（旧姓許）	昭五六	昭五八	昭五六 中国医薬学院	170	豊島区東池袋一ノ三六ノ七アルテル池袋九〇五号室 九八二－九二四四	
施宏哲	昭五六	在室	昭五四 中国医薬学院	168	杉並区和泉四ノ四七ノ七　戴方 (帰)台湾省高雄市新興区中山一路一三八号	研究生
川村賢司	昭五六	昭五九	昭四四 東京理大	354	埼玉県富士見市東みずほ台二ノ一九ノ四 〇四九二－五二－一九八五	日本実験医学研究所 〇四八六－八四－四六八二
斎藤隆	昭五六	昭五八	昭四二 東北大医	330	埼玉県大宮市敷町四ノ二〇二ノ五 〇四八六－四三－〇六三九	開業 〇四八六－四一－三五〇四
片山寿	昭五七	昭五九	昭四九	722	尾道市栗原町八五一三－一 〇八四六－二三－八三四八	開業
三浦久美子（旧姓佐藤）	昭五七	昭六〇	昭五七 千葉大薬	243	厚木市旭町五ノ四二ノ三六ノ三〇三 〇四六二－二八－三八三〇	
洪永隆	昭五七	在室	昭五一 中国医薬学院	160	新宿区西新宿八ノ一四ノ一七アルテール新宿七〇七号 三六三－九六六八	東京医大大学院（薬理学）
佐藤宏子	昭五七	昭五九	昭五七 金医大	112	文京区向丘一ノ一四ノ六ノ二〇三 八一五－三七三四	東邦大・医・内
楊美雪	昭五七	昭五八	昭四八 台北医学院		台湾・高雄市三民区大港街八四号 〇七－二九一一二九四	嘉南薬学専科学校薬理系副教授 台南県仁徳郷 七二ノ一〇六二－六六二四九〇
石井巌	昭五七	在室	昭五七	236	横浜市金沢区能見台通二八ノ三 〇四五－七八二－五九二六	東京医大大学院（薬理学）
渡辺泰雄	昭五七	在室	昭五〇 北里大薬大学院	176	練馬区中村南一ノ三六ノ一三ノ一〇八 五七七－三八六八	東京医大薬理学助手

氏名	入室年	退室年	卒業年度	郵便番号	現住所	摘要
猿原孝行	昭五七	在室	昭四五	431-11	静岡県浜松市伊佐地町八一五一 〇五三四−八六−二六一六	専攻生・湖東病院 〇五三四−八六−二二二二
今西信幸	昭五七	在室	昭四五 東薬	336	浦和市根岸一ノ一二ノ三 〇四八八−六四−九八八七	専攻生・墨東薬品㈱ 六三四−三九三一
渋谷裕史	昭五八	昭五九	昭五四	157	世田谷区喜多見七ノ二二ノ二七（箕輪方） 四一五−〇八一一	東京医大内科
佐々木珠美	昭五八	昭五九	昭五八 星薬大	121	足立区西保木間一ノ二二ノ七 八八五−〇三九七	
本間隆行	昭五九	昭六〇	昭五七	121	足立区西保木間二ノ五ノ六若松コーポA−二〇三 八五〇−七三三九	東京医大外科専攻生
周明勇	昭六〇	在室	昭五三 中山医学院・歯		台湾・台中市中正路二〇八号 〇四二−九二〇二〇二	研究生
増田幹生	昭六〇	在室	昭五九	104	中央区明石町八ノ二三聖路加病院(内) 五四一−五一五一〜五	専攻生
柄澤英一	昭六〇	在室	昭五三 帝京大・医	114	北区東十条三ノ三ノ一・小田急マンション七〇九 九二七−三五三三	専攻生・(都)豊島病院㈹ 九六一−三二八一
志村容生	昭六〇	在室	昭五八 東海大・医	102	千代田区麹町四ノ七 参議員議員宿舎五〇五 二三七−〇五〇五	研究生
川越康子	昭六〇	在室	昭六〇 東薬	113	文京区千駄木五ノ三七ノ一七 八二一−六〇六三	東京医大薬理学技手
辻裕子	昭六〇	在室	昭六〇 北里大・薬	292-01	市川市塩焼四ノ一〇ノ二ノ二ノ六〇四 〇四七三−九九−三一二五	東京医大薬理学技手
李淑美	昭六〇	昭六〇	昭四七 嘉南薬専	160	新宿区北新宿三ノ三八ノ一七恩田荘 三六一−〇九四七	聴講生・星薬大学院（修）

旧職員

氏名	入室年	退室年	卒業年度	郵便番号	現住所	摘要
大野 美代子	昭三五	昭五六		310	茨城県水戸市元吉田町一五〇九ノ五 〇二九二－四七－七四〇〇	
桜口 三重子（旧姓長戸）	昭四八	昭五二	昭四八 慶大	106	港区麻布台一ノ四ノ七 麻布中央マンション四〇八号 五八二－四八四〇	
関口 玲子	昭五二	昭五三	昭五〇 津田大	192-02	多摩市桜ヶ丘二ノ四〇ノ六 〇四二三－七三－〇四一五	
白井 かほる（旧姓宮原）	昭五三	昭五五	昭五三 青学大	413-01	静岡県沼津市岡宮一〇七〇ノ二 〇五五九－二二－六五〇六	
樋上 由紀子（旧姓藤井）	昭五六	昭五八	昭五五 東女大	134	江戸川区西葛西五ノ五ノ一四ノ五〇一 六七五－五九三三	
原 祥子	昭五八	昭五九	昭五八 東女大	177	練馬区西大泉一ノ一五ノ九 九二二－三〇五七	

編　集　後　記

原教授のご逝去、続いて茂子夫人のご他界と、三緑会並びに薬理学教室にとって激動の一年が過ぎ、先生の一周忌に当たる六月十九日にご夫妻を偲ぶ会が開かれました。三緑会会報も六月発行を予定しておりましたが、この会の模様を収録して発行することとしたため、発行が遅れましたことをお詫び申し上げます。

その代り偲ぶ会の当日、ご来賓の方々から頂戴しました数々の思い出話を再現することができ、大変内容豊富な会報が出来上りました。

改めて読み返して見ますと原先生の幅広いご活躍と、天衣無縫な生き方を描出する脚本なきドラマを見るような気がします。

長寿は最高の芸術と言って居られた先生のご自身の人生そのものが芸術であったと言えましょう。

そして先生のご遺産が大学に寄附されたことにより、原記念図書館の設立が具体的な構想として浮かび上って来ました。

ご自身の亡き後にまで大きな夢を実現させてゆく、先生の人生はまことに素晴らしいの一語に尽きます。

先生のご逝去により三緑会は創立以来最大の転機を迎えました。

原先生のもう一つの夢は、薬理学教室の限りない発展と三緑会の隆盛でありましょう。

教室の繁栄なくして同門会の隆盛はあり得ません。

三緑会はこの転機を薬理学教室の栄光の歴史を築く階の一つとして生かすことが、原先生のご遺志にも添うものと思います。

広報幹事　高　橋　則　行

三緑会役員

顧問　岩尾泰次郎先生
会長　渋谷　健
副会長　伊能秀記
幹事　河守和彦（会計）
〃　菊田能敬（総務）
〃　堀部真広（総務）
〃　高橋則行（広報）
〃　佐々木康雄（学術）
〃　松田宏三（会計）
監査　矢数四郎
〃　小島文夫

昭和六十年十一月一日
発行所
〒160　東京都新宿区新宿六ノ一ノ一
東京医科大学薬理学教室
電話　三五一－六一四一
非売品　三緑会